

Title	コマッキオ論争とムラトーリの方法
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学学報. 74(3) p.35-p.70
Issue Date	1987-11-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81163
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

コマッキオ論争とムラトーリの方法

米 山 喜 晟

Il metodo di Muratori nella disputa di Comacchio

Yoshiaki YONEYAMA

Riassunto

Cap. I Muratori e disputa di Comacchio

- i. Notizie generali della disputa di Comacchio, le cause, le situazioni generali, l'ambiente storico ecc. L'impegno incaricato di Muratori nella disputa. Il corso della disputa abbozzato da suo nipote Soli nella biografia di Muratori.
- ii. Notizie sulle opere principali di Muratori e Fontanini nella disputa. Le strutture a grandi linee delle cause nella disputa di due disputatori principali, Muratori e Fontanini.

Cap. II Un sommario dell'opera più importante di Muratori di questa disputa, cioè "Piena Esposizione dei diritti imperiali ed estensi sopra la città di Comacchio"

Cap. III Il metodo di discutere di Muratori nella disputa

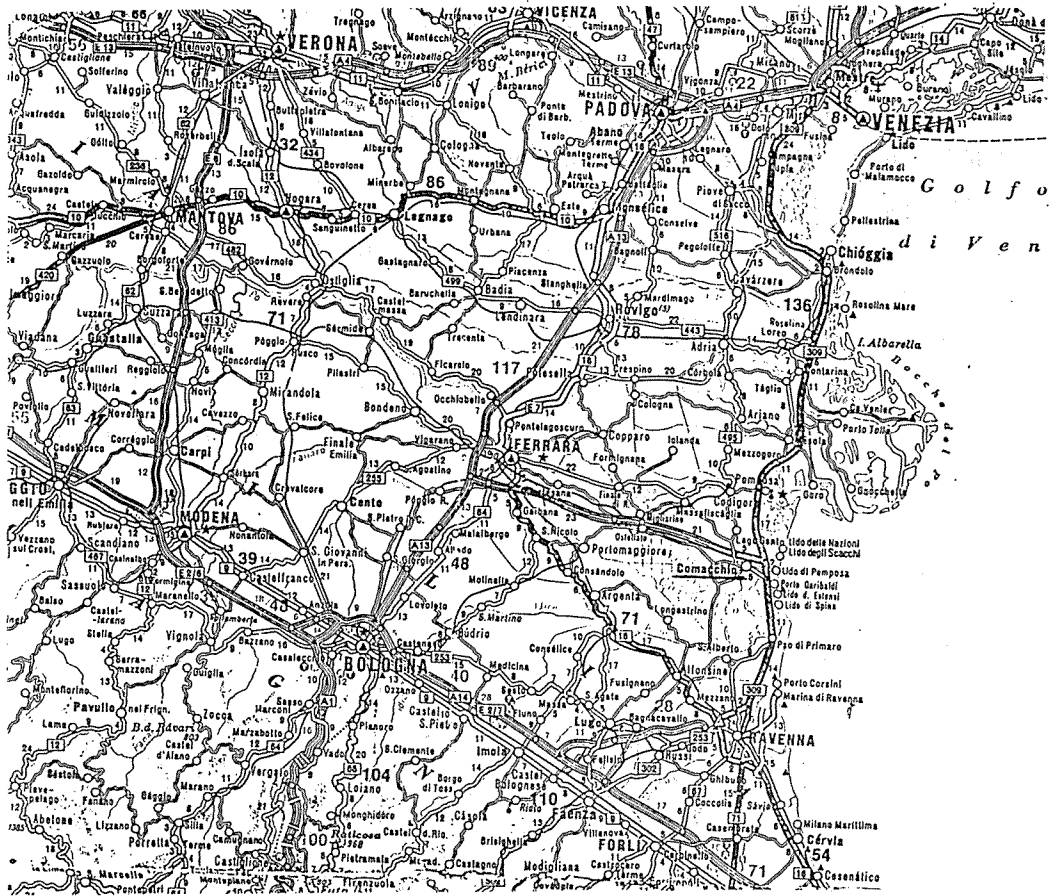
I punti più importanti

- i. La differenza del tempo. Muratori scrisse l'opera più importante dopo le due opere maggiori di Fontanini.
- ii. Le situazioni lo fecero scegliere una posizione teorica non troppo estrema e non troppo moderna. Per evitare la condanna di eresia e anche per la sua propria tendenza di pensare, Muratori scelse la maniera di discutere un po' conservativa e molto concreta, sempre tenendo ai documenti e ai fatti.
- iii. Muratori concentrò i suoi sforzi per provare il possesso di Comacchio dalla parte di Casa d'Este soltanto dall'anno 1354 all'anno 1597, costringendo Fontanini di provare la sua tesi con la stessa precisione. Così poteva criticare piuttosto facilmente la tesi più complicata e grandiosa dell'altra parte.
- iv. Aveva bisogno di evitare l'espressioni troppo emozionali, sofferendo sempre le riazioni troppo affettive dell'altra parte. Così doveva sempre discutere razionalmente e positivamente.
- v. Dalle situazioni sopradette, nasceva il metodo di discutere del positivismo sulla base dei documenti dell'età medievale e anche nasceva un interesse nuovo di quest'età da qui si sarebbero sviluppate le grandi opere di Muratori in futuro.

第一章 コマッキオ論争とムラトリー

第一節 コマッキオ論争とは何か

まずコマッキオ^①とは、エミリア＝ロマーニャ州のフェルラーラ県に所属している、アドリア海に面した現在人口2万足らずの小さなコムーネの名称で、それは元来13の小島を橋でつないで成り立っていたといわれている通り、小規模だがヴェネツィアを思わせる風景を含んだ漁港である。今では後背地の干拓が進んで陸続きになったが、19世紀の初頭までは水に隔てられ、今日以上にヴェネツィアに似ていた筈で、すでにロンゴバルド族の時代に確かな記録が残されている^②といわれる塩の生産と、その西南部に広がるコマッキオ峡谷 (Valli di Comacchio) で行われているウナギの養殖とで知られている。次に示す地図^③によって明らかな通り、フェルラーラの東南東約45km, ラヴェンナの北約30km, ヴェネツィアの西南西約80kmの地点に位置している。今日でこそフェルラーラ県に所属してはいるが、地理的には古代より大いに繁栄し、Onorio 皇帝の下で西ローマ帝国の首都となり、東ゴート王 Teoderico の下でも首都であり続け、さらにロンゴバルド族の時代には総督領の中心だったラヴェンナにより近かったという事実も注目に価する。



ところで14世紀の始まる前後から、このあたりに豪族エステ家の勢力が侵透し、その中葉にはフェルラーラもコマッキオもその配下に属し、いずれも約二世紀半にわたってエステ家の領地であった。ところが16世紀に入って戦乱が相次ぐ内に、エステ家の勢力は衰え、逆にフェルラーラの至上権を有してこれをエステ家に委ねていた法王庁の勢力が伸長するに至り、1597年10月公爵 Alfonso II d'Este が正嫡の相続人なしで没すると、当時の法王 Clemente VIII が、1567年法王 Pio V によって発布された、勅書の庶子とその子孫には「封土、知事の地位、代官位、公爵位^①」の交付を禁じるという規定を楯に取って、故 Alfonso II の従弟（庶出の叔父の次男）に当たるエステ家の相続人 don Cesare にフェルラーラの封土を与えることを拒否した。この時までフェルラーラを自分の所領の首都として、そこに壮麗な宮殿を築いた上、Guarino, Ariosto, Tasso 等当代一流の文学者を擁して、イタリア・ルネサンス文化の中心の一つとも見なうる華やかな宮廷を維持してきたエステ家側は、当然これを不満として抵抗したが、フィレンツェの反メディチ派の名門 Aldobrandini 家出身の果敢な法王 Clemente VIII は、「1592年12月23日、約3万人の軍隊をファエンツァに配置し、煮え切らぬ態度の don Cesare に対して最も厳しい形式で破門を宣告した^②」当時フェルラーラには don Cesare の相続を快く思わぬ Lucrezia d'Este を中心とする貴族たちの派閥が存在していたことや、フランス王 Enrico IV の調停もしくは圧力なども影響して、don Cesare は法王の精神的および軍事的攻撃に耐え切れず、結局フェルラーラを法王の甥^③ Pietro Aldobrandini 枢機卿の率いる軍隊に引き渡し、自らはモデナに移って、そこに宮廷を構えている。ところがこの時法王軍の一部は、フェルラーラによって他のエステ家領から隔離された形となったコマッキオ市とその領域をも併せて占領した上、両市をあわせて教会領の中に併合してしまった。実はこの時の占領が、必ずしもムラトーリ (Muratori, 以後 M. と略) が非難しているような単純な武力による占領ではなくて、この時コマッキオに反乱が生じ、「人民がその機会に乗じて有名なレ・カゼットの宮殿を略奪した^④」というような事態が生じていたとも伝えられているのだが、いずれにしてもエステ家の認識では、法王によってではなく皇帝によって与えられていたはずのコマッキオの領土が、フェルラーラ奪回のどさくさに紛れて、教会領に編入されてしまうという不正がこの時点で生じたわけである。さらに翌1598年1月12日、当時62才だった故 Alfonso II の妹 Lucrezia d'Este を代表とするエステ家側は、Aldobrandini 枢機卿を相手にファエンツァ条約を結び、フェルラーラのみならず、「完全に教会に所属すると証明されたわけではない^⑤」コマッキオ市とその領域の法王領編入を認めてしまう。

しかしこの決定を不満とするエステ家および、コマッキオ領の至上権 (sovrانيتà) を主張するオーストリアのハプスブルグ家とは、抗議を繰返しながら領土回復のチャンスを待った。そしてそのチャンスは、約一世紀の後、フランス王 Luigi XIV の野望をめぐって勃発したスペイン継承戦争の余波として到来する。1700年に法王に選出された Clemente XI は、フランスとオーストリアというカトリック圏内の二大強国の君主間の争いを憂慮し、厳正中立の立場を取って両者の調停に努めようとしたが、法王が至上権を有し、しかも隣接するナポリ＝シチリア領にまで戦いが

飛び火すると、双方の大使による働きかけが一層切迫して、厳正中立の方針がかえっていずれの側にも不満を生じさせる結果となった。^⑨特に時の神聖ローマ皇帝 Giuseppe I は、かつて皇帝権の下にあったと主張できるファルネーゼ公領パルマおよびピアチェンツァを1707年に自軍によって占領させ、さらにその翌年1708年5月31日には、ピエモンテ出身の将軍 Alessandro de Bonneval の軍隊を派遣してコマッキオを占領させてしまった。^⑩口の悪い Voltaire が「肯定し否定し、後悔して泣いたので聖 Pietro そっくりだ」と評したと伝えられる Clemente XI は、皇帝の実力行使に激しく抗議し、軍隊の撤退を求める交渉を粘り強く続けたため、Giuseppe 帝は撤退を決意してその準備を進めていたが、皇帝の死(1711年)でそれは実現されず、^⑪帝位が弟の Carlo VI に移ったため、占領はユトレヒト(1713)、ラシュタット(1714)両条約が締結された後も続行された。しかしいずれの皇帝も、単に皇帝およびエステ家の領土保全のためにこうした占領を続けたのではなく、全ヨーロッパ情勢に対する布石の一環として派兵、占領していたに過ぎなかったため、しかも些細な領土のために法王権と敵対することの危険は、この時代にはまだ決して小さくはなかったために、次の次の法王 Benedetto XIII の時代、1724年11月25日にコマッキオ返還の調印がなされ、翌1725年2月20日に、17年間の皇帝軍による占領の後に、正式に法王の支配下に返還されるに至った。^⑫

歴史的イベントとして考える時、オーストリア皇帝軍によるコマッキオ占領は、わずかな人口を有した小さな沿岸都市をめぐる、ほんの取るに足らぬ事件に過ぎないのであるが、この占領に関して、法王庁側とエステ家側との双方からその当否をめぐる主張が発表され、それも数度にわたって延延と論争が繰り返されることとなった。ところが当時エステ家の図書館および公文書館の館長(bibliotecario)の地位にあって、^⑬同家の古文書の管理に当たり、またその内容にも最も通じていたのが M. であったために、当然この論争の矢面に立たされ、長年に亘ってそれに関与しなければならなかった。なお法王庁の最も代表的な論客は、それ以前 M. と親しく学問上の文通を続けて、互いに認め合っていた Giusto Fontanini^⑭(1666—1736)で、その間の事情を、M. の甥 G. Soli M. は、M. の伝記中で次のように記している。

「(第九章) 第二節 コマッキオおよびフェルラーラ市に関する論争

M. の『完全な詩』に対する批評が現われつつあった間に、彼は極めて重大な論争に加わる義務を負った。それはヨーロッパ中に喧伝され、巾の広い主題を扱わねばならなかったために、信じ難い程の研究と労苦を彼にもたらした。何故ならその主題に関するこまごまとした資料は、ほとんど無数といえる程の膨大な数の書物をはじめ、既刊、未刊あわせて多くの文書の内に散在し、隠されていたからである。エステ家の君主たちは、コマッキオ市とその峡谷とが、法王庁によって1598年に不当に奪われ占有されたことを、常に主張してきて、今日なおそう主張し続けている。何故なら、それは1354年に封土として彼らにそれを与え、それ以来現在に至るまでそうし続けている神聖ローマ帝国皇帝に属する領土だからである。法王庁と皇帝 Giuseppe との間に不和が生じた結果、1708年皇帝はその所領を取戻すべく自らの軍隊を派遣した。そこで法王 Clemente XI

も武力を行使したものの、その戦いは忽ち決着を見て和解が成り、コマッキオ市のみならず、やはりエステ家が法王庁に奪われたと主張しているフェルラーラ公領に関しても、それに対する双方の権利を、友好裡に検討することが決定された。そこで大がかりな論争が発生し、その問題のために、ローマで法王庁の高官と、皇帝およびエステ家側の高官とによる代表者会議 (Congressi) が、何度となく開催された。それにもかかわらず、両市の帰属に関する論争は決着を見なかった。さてこのように紛糾した事態の中で、ローマでは、興奮しやすく誰をも軽侮している Monsig. Giusto Fontanini と Lorenzo Zaccagni 修道院長の才筆 (le penne) が、法王庁の権利を擁護するために選ばれた。Fontanini はこの時までには両者の間で交された多くの手紙が示している通り、M. の親しい友であった。しかし彼は、今度の論争相手に M. が当たったことを見抜くと、キリスト教徒の愛の掟は勿論、友情の掟をも完全に忘れてしまったのである。

この論争に際して日の目を見た最初の文献は、1708年に世に出た Monsig. Fontanini の書簡 *Il Dominio temporale sopra la Città di Comacchio per lo spazio continuato di dieci secoli* (別稿で文献 1. として紹介済みの論文。以下の文献の番号も同様である) であった。これに対して M. は同年 *Osservazioni sopra una lettera intitolata "Il Dominio temporale ecc."* (文献 2.) と題する文書で反論した。翌1709年には Fontanini が再び登場し、上述の書簡を再び刊行、さらにそれに *Difesa del Dominio temporale sopra la Città ecc.* (文献 3.) を追加することによってわが司祭長 (M. のこと) に答えた。そしてその翌年、法王庁がコマッキオ占領軍を撤退させるためにウィーンで猛烈な裏工作を行ったので、M. に対しその主君の (エステ) 公爵より、自分に代わって皇帝 Giuseppe 陛下あての *Supplica* (『請願書』, 文献 5.) を書くよう命じられたが、それは Fontanini の前述の著述 (文献 3.) と、同じころに出版された Zaccagni 修道院長の *Dissertatio historica de summo apostolicae sedis imperio in urbem comitatumque Comacchi* (文献 4.) とを、反論を加えぬまま放置しておかぬためであった。その間にも、M. はより詳細な著作をしつつあった。やがて 1711年にわが司祭長は、*Quistioni Comacchiesi* (文献 6.) を出版、Fontanini も同年 *Difesa seconda del Dominio temporale ecc.* (文献 7.) を出版した。

さらに1712年、皇帝とエステ家がコマッキオに対して持っている権利を十分に公衆に知らせると共に、あわせてローマ法王庁側の弁護人たちによる上述の著作に答えるために、*Piena Esposizione dei diritti imperiali ed estensi...* (文献 8.) が M. によって著作、刊行された。その中でコマッキオはフェルラーラには決して所属していなかったことと、法王がコマッキオをエステ家に封土として与えたという事実はなく、過去何世紀にもわたってエステ家は皇帝のみによってこの土地を委任され続けており、従って今でもそうであること、それ故百年以上に及ぶ時効取得権 (がエステ家にあること) は疑いの余地がなく、そのことが法王庁自身によっても認められていることを明らかにした。(中略) M. が *Piena Esposizione* を刊行した後、ローマ法王庁側の弁護人たちは、まともな反論は加え難いと判断して沈黙していたが、法王庁がウィーンで皇帝 Carlo VI に対し、コマッキオを放棄させるための工作に一そう強力に従事し始めた時期である1720年、よ

うやく Monsig. Fontanini が *Risposta a varie scritture contra la Santa Sede in proposito di Comacchio, pubblicate dopo l'anno 1711* (文献10.) と題する小著を発表したものの、この高位聖職者の努力はすべて、(文献8. に対してではなく) *Quistioni Comacchiesi* (文献6.) に反駁することのみに傾けられていた。そのわけは、皇帝権およびエステ家のために書かれた最近の著作であり、コマッキオに対する皇帝とエステ家の権利が悉く論じられており、私が述べた通り、法王庁側からそれまでに出版されたあらゆる文書に対する返答を含んでいる作品 *Piena Esposizione* に対決することが、Fontanini には不可能だったからである。その Fontanini の著作は、1720年10月9日に刷り上げられたが、すぐには世に出なかった。やがて Domenico Maria Giacobazzi 修道院長(その経歴の部分中略)が早速何とかそれを一部入手してくれたおかげで M. は直ちにそれに対する反論に着手し、それに *Disamina di una scrittura intitolata : Risposta a varie scritture...* (文献11.) という標題を付けた。その年の終わらぬ内にその著を書き上げただけではなく、印刷も完了した。彼の著作中で、これ以上に早く書かれたものはなかった。それは主君の公爵が、反対派の著作が世に出ると同時に、彼の反論が出版されることを強く望まれたからで、実際の通りになった。そんなに急いだにもかかわらず、その著はローマ側の賢人たちによってさえ、M. の筆になった最良の著作だという評価を得た。それは彼が論敵に答えた際の論理の力に、相手に対して示した寛容な態度が加わった結果だった。ところが相手方とはといえば、すっかり激昂してしまい、教会人や次王庁の弁護人はおろか、どんなまともな著者にもふさわしくない侮辱や嘲笑、度外れた暴言などをやたらと吐き散らしていたのである。こうしてペンの戦いは幕を閉じた。だがローマ法王庁は、別の手段を弄することによって、コマッキオの奪回に成功したのだった。ただしこの市に対する皇帝とエステ家の権利は、正当なものとして、無傷のまま守られたのである。^⑩
₉₎

M. の甥 G. Soli M. による伝記のこの部分は、簡にして要を得た形で叔父 Lodovico Antonio のこの論争における活動を伝えているので、あえて長文の引用を行ったが、勿論 M. のこの方面の著作が上記の5点に尽きるのではなく、フェルラーラに対するエステ家の権利を主張した *Ragioni della serenissima Casa d'Este sopra Ferrara confermate e difese, in risposta al Dominio Temporale della Sede Apostolica, Modena MDCCXIV* (文献9. 本論では考察の対象からはずす)をはじめ、印刷された著作が全14点、未刊の作品が7点あるとされている。だが刊行された作品の内、既出の6点を除く8点中には、2点の仏訳の他、代表者会議用の文献を始め、ほぼ上記の文献に含まれた主張を整理要約した作品(内2点は19世紀末に刊行)なので、上記の文献をトレースすることによって、コマッキオをめぐる M. とその論敵 Fontanini の主張は、その全体を把握できると思われる。なお未刊の作品の中には、上記の文献の主張の枠から一步踏みこえた内容を含むものがあることが、Bertelli によって指摘^⑩されているが、その問題については後の機会に触れることにする。

すでに私は本学『学報』において、前記の文献1.~11. の内文献9. を除く10文献を簡単に紹介

し、特に文献1. 2. 3. および7. については要約を行って概観したので、とりわけM.の論敵Fontaniniの主張の大体は紹介済みであるが、次節で再度簡単にM.とFontaniniの立場の違いを出発点から瞥見し、次章において、本論争に関するM.の主著である文献8. *Piena Esposizione...*の内容を要約、紹介した後、第三章において特に文献8.を中心に、本論争におけるM.の論証方法について検討し、その特長を明らかにしたい。そして最後にこの論争の持つ意味を簡単に考察して結びとしたい。

第二節 コマッキオ論争における双方の主張の概略

コマッキオの領有権をめぐる、M.とGiusto Fontanini(以下F.と略)とが繰返し論じた論文を交互に読み進めていくと、それがほとんど歴史的事実の再構成と、その証拠とされている証書等の文献の真偽や、引用された文章の解釈の適否の検討などに費されていることが分かる。本来ならば、この問題は当時確立されつつあった国際法との関わりや、ローマ法や封建法との関係、あるいは住民の意思をどう考えるか等の問題について、複雑極まりない論議が生じて、全く議論が噛み合なくなる可能性さえあったのに、そうした原理的な問題は大部分論議から外されて、また住民の意志の問題のように時々触れられている場合でも、余り論議が深められることはなく、ほぼ古来の法王権と皇帝権の領域^⑧をめぐる論議として展開されている。勿論一応は法学的素養の持主^⑨だとしても、法律の専門家ではなく文献学を専門とする両者がこうした論議の主役となったのも、要するにコマッキオが本来は皇帝領だったか法王領だったかということを、文献によって証明するための争いだったために他ならない。

神聖ローマ帝国の軍隊がコマッキオを占領した時、F.が行った最初の抗議、*Il Dominio temporale della Sede Apostolica sopra la Città di Comacchio per lo Spazio continuato di dieci secoli*『十世紀の期間にわたって継続したコマッキオ市に対する法王庁の世俗的支配権』(文献1.)という論文は、わずか60ページの小冊子ではあったが、全46章を通じて、古来の同市の領有権を辿ったものである。それによると、コマッキオは古来東ローマ帝国の総督領(Esarcato)の一部で、一時はロンゴバルド族に不法に占領されたこともあったが、フランク王Pippinoの圧力で法王Stefano IIに「返還(*restituire*)」された領土の一部であるとされている。Pippino自身はこの行為を「寄進(*donazione*)」と呼んだが、F.は東ローマ帝国が聖像禁止令をイタリアでも施行しようとして反乱を引き起こした後にイタリアを放棄していたため、かつての総督領はすでに法王権の下に属し、独立した教会国家を形成していたと考えて、Pippinoの行為を「返還」と呼んでいるのである。その後のカロリング朝の皇帝たちも、一貫して法王権を認めていたことは、多くの資料から明白だが、特に817年の皇帝Lodovico Pioの憲法(*Costituzione*)には、法王Pasquale Iに総督領の全権が与えられることが明記されていて、おまけにそれに所属している都市名が一々列挙され、その中にFerrariam, Comaclumの名が見出される^⑩とする。その後の君主やドイツの皇帝たちも法王に対して同じ権利を承認し続けていて、たとえばオーストリア皇帝の先祖に当

たる Ridolfo I も、1275年以降5回も法王庁の権利を確認した。

他方エステ家は、F.によると元来はパドヴァの一貴族に過ぎず、1251年にフェルラーラのポデスタとなってからようやく頭角を現わし始め、1332年にはじめて法王庁からフェルラーラの代官の地位 (vicariato) を得ることができたが、当初は任期10年の地位で、その後更新を繰返している内に、領主のように振舞うようになった。

なお法王庁は、自らの領地であるコマッキオを正式にエステ家に任せたとことは一度もない。その理由は、当時コマッキオがフェルラーラの管轄地 (distretto) の一部だったため、おまけにわずかな漁民が住んでいるだけの貧しい土地だったため、わざわざ記す必要がなかったからである。問題のコマッキオは、1332年フェルラーラがエステ家の治下に入った時、当然その一部としてエステ家の治下に入ったが、勿論法王庁がこれらの都市の至上権 (sovrانيتà) を有している。その証拠はいくらでもあるが、代表的なものは、1371年 Anglico 枢機卿が法王領のローマニヤ地方を一巡した際にコマッキオにも立寄ったことや、16世紀初頭法王 Giulio II がエステ家の Alfonso I に対して、コマッキオで塩を製造することを禁じた事実などである。したがって、エステ家が申し立てている皇帝が同家をコマッキオに封じたという事実はなく、皇帝 Lodovico II が Ottone d'Este に与えたという854年の証書を始め、それ以降のすべての文書は無効である。

以上が法王側を代表して F.が行った主張であるが、それに対して、M.は Osservazioni sopra una lettera intitolata...『十世紀...と題された文書に対する、ローマ宮廷のある高位聖職者に宛てた書簡で述べられた考察』(文献 2.) という、題名も長いが F.の文書のほぼ3倍の反論を、同じ1708年に発表した。

その中で M.はまず総督領が法王権下にあったとする F.の主張に対し、皇帝の名入りの貨幣がローマで铸造されていたとか、法王権に属していたとされる様々の都市で皇帝が派遣した判事が裁判を行った等々、多くの事例を挙げて、法王領なるものの独立性に疑問を呈するが、コマッキオそのものについては、総督領の一部ですらなく、むしろ古来イタリア王国に属していたと推定する。同市とエステ家との公式な関係は、皇帝 Carlo IV がイタリアに南下して、エステ家の Aldobrandino に証書 (diploma) を与えたのが最初である。ただし1297年5月に同市が自発的にエステ家に「服従 (dedizione)」し、その後1309年に古来しばしば同市を支配したラヴェンナが占領したためエステ家の支配は中断したが、1325年に再び同市が自発的にエステ家に「服従」して、以後は実質的に同家の支配下にあった。1354年の Carlo IV の証書は、こうした既成事実の追認として与えられたもので、エステ家は以後1598年の Aldobrandini 枢機卿による占領の時期まで、ほぼ連続して支配し続けている。1598年同市が法王領に併合された時は、エステ家は勿論、至上権を有する皇帝もそれを認めたりはしなかったが、当時皇帝がトルコとの戦争に忙殺されていたために、放置せざるを得なかった。だが皇帝はその後7度もエステ家の権利を確認した。法王庁側が主張する、コマッキオがフェルラーラの「管轄地」の一部だったとする説は、事実無根で否定する証拠はいくらでもある。Giulio II による製塩の禁止なども、エステ家が当時の状況から、自らの利

害に基づいて妥協したに過ぎず、法王権を認めたわけではない。エステ家の代理人らの思い違いや愚かさのため、他にも誤解を招くような行為が見られたが、エステ家自体がコマッキオにおける法王権を認めた事実はない。要するにエステ家は、1354年から1598年まで約二世紀半にわたってコマッキオを占有し続けたので、当然「時効取得 (prescrizione)^⑨」が成立している。それ以後の法王庁による不法占有に対しては、皇帝とエステ家が再三公式の抗議を行っているので「時効取得」が成立することはありえない。だから1708年の皇帝軍によるコマッキオ奪回は正当な行為だった。その後 M. は Clemente VIII がフェルラーラをエステ家から取り戻した理由に反対するため、Don Cesare の祖母 Laura が Alfonso I と正式に結婚していたという証拠を延々と列挙しているが、卒直に言ってこの部分は相当怪しげだと言わざるを得ない。

この『考察』の中で、M. がやや詳しく法学的検討を行うのは、「一つの事物が相前後して正当な文書によって二者に与えられた場合、そのいずれが先であるかを問うべきではなく、与え手によって実際に引渡された人が所有すべきである^⑩」とする封建法学者らの学説を引用して、たとえ万一皇帝が法王にコマッキオを与えていたとしても、それが実現されていなかった以上、法王には権利が無いと説いた箇所だけのようである。その際も大して深入りしている訳ではなく、結局 M. は F. が当初に敷いた歴史的過程の解明という路線を踏襲し、むしろその枠をより狭く限定しつつ、F. とは別の歴史的枠組を簡単に素描したといえるだろう。

実はこの『考察』が記されて時点では、F. の方がはるかに準備を整えていて知識も深かったとされている^⑪。おまけに M. の側ではロンゴバルド族やフランク族の時代に関する文献が非常に乏しかった^⑫という事情もあって、たとえば皇帝の大臣 Huldenberg は、M. のこの作品を読んで、当時ヴェルフェン家の歴史の執筆を依頼されていたため（ヴェルフェン家はエステ家と同根といわれる）この論争に深い関心を示したあの哲学者 Leibniz あての手紙で、『考察』における M. の説得力に危惧をもらしているようだ^⑬。たしかにその後の論争の展開ぶりにも、M. の態勢の遅れは認められるようで、F. が翌1709年に本文のみで330ページに及ぶ文献 3. *Difesa del Dominio temporale...* (*Difesa I* 『第一の弁護』と略称) を刊行、さらに1711年に、本文のみで318ページ、付録も合わせて400ページ近い大著、文献 7. (*Difesa II* 『第二の弁護』) で堂々の論陣を張ったのに対し、M. の方では1708年の文献 13.^⑭ *Altra lettera diretta ad un prelado della Corte Romana* (正味42ページ、『もう一通の手紙』)、1710年主君に代わって皇帝に提出した74ページの文献 5. *Umilissima Supplica* (『いとも恭順なる請願書』)、あるいは同年のエステ家の観利の解説書である文献 14. (62ページ, *Succinta Esposizione delle Ragioni...* 『簡潔な解説』)、1711年の文献 6. (54ページ, Q.C. 『コマッキオ問題』) 等々、他にもあるようだが、いずれも100ページに満たぬ公開書簡やパンフレット類を相次いで出版することで、防戦に努めていたという印象が否み難い。

しかし1712年、ついに M. は前年の F. の『第二の弁護』によって相手の主張が語り尽くされたと見るや、それに答えて、満を持していたかのように大著、文献 8. *Piena Esposizione dei diritti imperiali...* 『詳細な解説』を刊行、それは量的にも F. の文献 3. や 7. の一倍半は軽く上回ってい

るだけでなく、Bertelli が『『考察』と『詳細な解説』をへだてる4年間の内に、M.の内では変身が成し遂げられた^⑧』とか、「M.の読書量 (letture) においても、知識 (conoscenze) においても、疑いなく目覚ましい増進ぶり (accrescimento) が現われている^⑨』と評したような、質的な変化が認められ、抑制の利いた緊密度の高い文章を考慮すると、M.の数多くの著作の中でも特異な地位を占める傑作となりえているようである。

しかし論争というものがあくまで前の主張の延長線上で展開されている以上、たしかに杜撰な部分は含まれていても、『考察』で展開された歴史的枠組そのものは、『詳細な解説』の中でもそのまま受け継がれたことは言うまでもない。ということは、『考察』の歴史的枠組には、『詳細な解説』で行われた緻密な論証を支えるに足るだけの堅固さがあったということで、たとえ準備不足ではあっても、M.が大局的見地においては誤っていなかったことを評価しなければならないであろう。当初、F.とM.が主張した枠組をごく簡単に年表化すると下図の通りである。

F. の 立 場

コマッキオは本来フェルラーラの一部で、フェルラーラは総督領。なお聖像禁止令 (726) をめぐる反乱以来、総督領は東ローマ帝国が放棄したので法王権の下にあった。

755 フランク王 Pippino、総督領をロンゴバルド王 Astolfo より奪回して、法王に「返還」。以後フランク族の王や皇帝は常に総督領を法王のものと認めた。

817 フランク皇帝 Lodovico Pio の憲法が法王権を承認。コマッキオの名を明記。

ドイツ皇帝も総督領の法王権を認めた。特に1270年代、Ridolfo I はしばしば法王権を確認した。

1332 法王 Giovanni XXII、エステ家を当初は任期10年のフェルラーラの代官に任命。コマッキオも自動的にエステ家治下に入った。その後長くその地位に止まる内にエステ家は両市の領主の地位を確立した。

1509 法王 Giulio II、コマッキオでの製塩を禁止。

1598 法王 Clemente VIII、フェルラーラとコマッキオを Pio V の法王勅書に基づき取り戻す。

1708 皇帝軍がコマッキオを武力で占領。

M. の 立 場

コマッキオはフェルラーラとは全く別の都市で、総督領の一部でもなかった。フランクの支配後はイタリア王国領に属した。

809 東ローマ帝国軍がイタリア奪回を企ててコマッキオに侵入した時、その砦にフランク族がいて撃退。フランク族の領地だった証拠である。

ドイツの皇帝たちは、自分の臣下であるラヴェンナ司教をしばしばコマッキオに封じてその領主とした。だからコマッキオはラヴェンナの支配下にあることが多かった。

1297 コマッキオ市民、自発的にエステ家に「服従」する。

1309 コマッキオ、ラヴェンナに占領さる。

(1317 フェルラーラ、エステ家を領主を選ぶ。)

1325 コマッキオ、再びエステ家に「服従」。

1332 法王 Giovanni XXII、エステ家にフェルラーラを封土として与える。

1354 皇帝 Carlo IV エステ家にコマッキオを与える。

以上の通り両市は別の時期にエステ家領となった。

1598 法王軍武力で、不当にコマッキオを占領。以後皇帝は7度エステ家の権利を認め、法王に抗議。

1708 皇帝軍正当な権利に基づきコマッキオを取り戻す。

M.の文献2.による反論に対し、F.は長文の文献3.で答えたが、その中でコマッキオに関して特に興味深い主張をごく簡単に紹介すると、Arrigo VIの勅書にはコマッキオがフェルラーラの一部と分かる記述があること、1371年 Anglico 枢機卿が法王領を巡回した時、同市にも立寄ったこと、エステ家がフェルラーラのために払った貢租の文書に、「フェルラーラおよび他のいくつかの市より (et non nullis aliis civitatibus)」^⑧とあるが、それはコマッキオとしか考えられないこと等等が指摘されている。さらにエステ家側が最も頼りにする1354年のCarlo IVの証書は、13世紀前半のFederico IIの証書とそっくりだから、それを変造したもので、しかもFedericoの証書には同市の名がないので、その部分を追加したに違いないと推理する。また1297年および1325年のコマッキオ市民の自発的「服従」は、もし事実だとすれば、人民が勝手に君主を変えようとする篡奪行為だから、不法かつ無効である。1598年のコマッキオ返還は、法王軍の武力侵略ではなく、司教Giraldiが市の支配権を握った。フェルラーラ問題については略すが、Laura正妻説への反論は説得力がある。さらにM.がローマや総督領の法王権に否定的見解を示したことを厳しく非難、Pippino, Carlo Magno親子のころすでに東ローマ帝国は、総督領への権利を失っている、何故ならStefano IIからロンゴバルド族の侵略に対して援助を断っているからだ、Grozio (グロティウス)の権威を借りて反論^⑨する。またM.が皇帝権の証拠として数々指摘した行為は、皇帝に課せられた法王に対する「擁護 (avvocazia)」の義務に基づく行為で、大部分それで説明できる。法王暗殺未遂者に「大逆罪 (laesae majestatis)」が適用されたことから、法王が最高君主だったことが明白だとする。

以上目ばしい部分を拾ったため散漫になったが、もう一つこの文章で注目されるのは、M.がエステ家の古くてはつきりしない部分を論議の対象から外したことを嘲笑している点で、おそらく肩すかしを食わされた感じがしたものと思われる。エステ家を皇帝権と法王権の争いの山場から外したわけで、F.には相手が逃げたように感じられても不思議ではない。文献2.のLauraの結婚を主張した部分が隙だらけだったことと、エステ家の古い時代の権利は全然主張されなかったことで、F.は大いに気を良くし、自信を深めた筈である。

これに対して書かれたM.側の小著は、いずれも文献2.のコマッキオの部分の再確認のようであるが、論点を整理して文献8.を準備するためには決して無駄ではなかった。たとえば文献6.中の第一問「コマッキオが古い時代に法王庁に寄進され保持されたことがうまく証明できれば、それが果たして法王庁の主張にとって有効か^⑩」という問いと、その後エステ家に「時効取得」が生じたので「否」だとする答は、文献8.におけるM.の論証の基盤ともいえるものである。こうしたM.の度重なる波状攻撃、とりわけM.が1710年ローマの代表者会議 (Congressi) に託した^⑪エステ家側の主張には、F.を予想外にいら立たせる内容が多かったらしく、文献7.におけるF.には、文献3.を執筆したころのような優越的な余裕はなくて、威丈高な怒りに充ちている。たとえば冒頭から、代表者会議に皇帝側の代表から陳述されたエステ家側の主張なるものは、法王の世俗的支配権を否定するもので、Arnaldo da Brescia, Vicleffo (ウィクリフ)、Luteroらの異端

に連なるものと断罪している。またエステ家側の主張する歴代皇帝の総督領における様々な活動は、君主としてのそれではなく、Pufendorf (プフェンドルフ) が規定した、「擁護」の義務に基づくものだと、国際法の權威の説を引いて反論する^③。さらに Lodovico Pio の憲法を偽物とする説をも、それに従う者は異端者だと非難する^④。いよいよ法王側弁護人の切札である「異端」が乱発され始めているのである。文献3.にも「フランクフルト派の異端」^⑤について触れた箇所があるが、このように乱発されてはならず、F.のこの態度の硬化はやはり注目に価する。外的な理由も想像されなくはないが、F.自身のコマッキオがフェルラーラの一部だったとした説には無理があり、それをM.のみならず、味方の筈の法王庁側の論客 Zaccagni 修道院長から指摘された^⑥ことが、こうした威丈高な態度の原因の一つと考えられなくもない。一見粗雑なM.の『考察』の方が、目一杯主張を盛りこんだ筈の『第一の弁護』よりも、論争としては先行き有利だということや、M.が意外に豊富に自説を攻撃する材料を溜めこんでいることを代表者会議で察知したことが、こうした高圧的な態度を誘発していると言えなくはなさそうである。やがて現われる文献8.の影響が、すでにF.を脅かして、その威力に備え、先手を打って攻撃し、できればその口をふさごうとしていると考えることができないだろうか。そう言えば、かなり文献8.の問題点を先取りしている点が多く、代表者会議にはM.が相当いろいろな資料を提供していたことが推察できよう。紙数の都合もあるので、それらの問題は、次章のM.自身の検討に委ねるが、たとえばF.がエステ家側は Giovanni Villani の説^⑦を利用して、Ridolfo I の証書の中傷したと憤慨している点などは特に興味深いように思われる。F.は Villani を誤ってギベッリーニ派だとしているが、それよりもこうした市民の記録を利用したこと自体を非常識だとする態度は、当時としては必ずしもF.一人のものではなかったのではないと思われる。またマントヴァにおける発行日時に関する皇帝のアリバイ^⑧などから Carlo IV の証書を否定した際の手法、コマッキオ市民がエステ公を「我々の公爵の (Nostri Ducis)」^⑨と記したのは、フェルラーラ公領の臣民だったためだという奇妙な指摘、あるいはエステ家が「コマッキオ領主」と名乗り始めたのは、16世紀の前半にメディチ家との序列争い^⑩が生じて、一つでも肩書をふやす必要が生じたからだという主張等は、いずれも一応もつともらしく、それなりに興味深い主張だといえないこともない。

第二章 『コマッキオに対する皇帝およびエステ家の権利の詳細な解説』の要約

すでにその重要さを述べて来た、本論争中におけるM.の主要論文の文献8.『詳細な解説』は、内容を要約して紹介するだけの価値を有していると思われるので、以下でそれを行う^⑪。

神聖ローマ帝国皇帝 Carlo VI あての献辞 (iii-v) コマッキオが皇帝領であることを証明することは、エステ家のみならず、皇帝権の名誉にとっても重要である。それが皇帝とエステ家の領地であることは確実だ。エステ公は、陛下のお力でこの紛争が正しく解決されるものと確信しておられる。年表 pp. vii-xxxiii, 目次 xxxiv-xxxx (ママ)。

序文 (pp.1-22) 法王庁側の文献 *Dissertatione Historica* (文献 4.) は説得力は乏しいが、品位の点でもう一人の論者 (F.) の作品よりも評価しうる。もう一人の方は、はげしい罵倒、煽動、歪曲だけである。我々はコマッキオについてのみ論じているので、法王権一般を否定しているわけではないのに、異端呼ばわりは心外。特に自分が Arnaldo da Brescia の異端に陥っているという非難は不当である。Arnaldo は、聖職者のすべての俗権を否定したが、我々はそんなことを夢にも考えていない。これまでエステ家側が公式に発表した文書は3つしかなく、それ以外の文書の責任は取れない。こんなひどい罵倒が法王の命で書かれたとは信じ難い。我々はあくまで法王の俗権について論じていて、信仰問題を論じるつもりはない。世俗の問題と信仰問題は区別されるべきだ。かつては、法王の選出の際皇帝が承認を行った。たとえば Gregorio I の手紙によっても、それが悲しむべき抑圧でなかったことは明白だ。相手方は、我々がこの論争でパドヴァ市民がヴェネツィアを建国したと述べたため、ヴェネツィアを侮辱したと非難しているが、我々は別にパドヴァがヴェネツィアを征服したと言ったわけではない。ヴェネツィア人も認めている定説を述べただけなのに、完全な中傷である。このように『第二の弁護』の作者の方がひどいことばで我々を罵倒し、中傷している。しかし我々の方では相手方への敬意を失ってはいない。相手方は、さらに早く書く競争にも私を巻きこもうとしたが、私はその弊害を恐れ、「十分良く」書ければ、「十分早く」^④書いたことになると答えたい。我々の反論は、Ⅰ. 古い時代の皇帝は法王領全体に対して至上権を有していたこと、Ⅱ. 皇帝の至上権は勿論コマッキオにも及び、それは今日まで続いていること、Ⅲ. 法王庁はエステ家を同市に封じたことはないことの3点から成っている。

Cap. I Difesa I は私が法王に対し法王領の用益権しか認めていないと非難するが、私は理由あって、それは不明だとした。法王方が「返還」と呼ぶのは、コンスタンチヌスの寄進状という偽文書に基づく。フランク族君主らの返還 (実は贈与) 後も、総督領が法王権下に属したというのは真実ではなく、それ以前は、総督は東ローマ帝国の大臣に服従していた。ピピン以前、ローマも総督領も、東ローマ皇帝の領地だった。

Cap. II 法王方の反論は証拠不十分。たとえば Paolo Diacono は法王を Patrizio, Esarco のようなものとする。法王と Carlo Magno とがお互いに相手を Patrizio と認め合った例もある。法王は Carlo Magno に、総督領の首都 Ravenna 大司教の任命を委ねた例があり、いわゆる贈与の後も、Carlo Magno に君主の権利が残っていたことが明白に推察しうるが、だからと言って断定するつもりはないので、不明とした。

Cap. III 800年以前のことは不明だが、以後は Carlo Magno が皇帝権を確立した。Difesa の著者は皇帝が Avvocato (擁護者) として、Avvocazia (擁護権) を行使しただけとするが、Anastasio ら多数の証言者は、ローマ人が法王を嫌って、皇帝を求めたとする。また Eginardo の伝える Carlo Magno 帝の遺言では、ローマもラヴェンナも、他の市と同じ扱いを受けて21市の仲間に一括されている。

Cap. IV Lodovico Pio の憲法が偽作である可能性が高い 8 つの理由。①写本間の差が大きすぎる。②Anastasio が記録していない。③当時の東ローマ帝国領であるシチリア、カラブリアまでを法王に贈る。④逆にコルシカ、サルデーニャについては、この後もフランク族は手放していないのに、この文書は贈ったことにしている。⑤ベネヴェント、サレルノ、上下のカラブリア、ナポリ等信じ難い（程気前の良い）贈与を行っている。Baronio の傍注の *Vestra* と *Nostra* の問題（略）。⑥この憲法の *formola*（定式文句）も他に類がなく変だ。⑦Ottone I の特許状も、Pippino, Carlo Magno の贈与には触れながら、Lodovico Pio については触れていない。⑧Lodovico Pio が贈ったシチリア等は、Ottone I も Arrigo II の文書には全く痕跡がない。以上の理由で後世の偽作らしく、どうやら Gregorio VII 時代の偽作らしい。第一この憲法の内容は、Pasquale I が皇帝に無断で選出されたため、罰として就位式をやめた Lodovico Pio の行為と矛盾。むしろ法王の選出の際皇帝の同意を不要とすることを求めた Gregorio VII の時代の風潮に合致している。私はこの意見を述べるに当たって異端者の説など借りていない。その内何人かは読んだこともない。むしろ私は信心深いカトリック教徒の Pagi が、誰でも無難に入手できる本の中で記した、「Lodovico Pio によってローマ教会に行われたとされる寄進は、コンスタンチヌス大帝のそれらに劣らぬ真赤な虚偽だ^④」ということばを誰でも認めると信じる。

Cap. V フランク族の皇帝が至上権を有していたと思われる証拠が多い。法王就位の際皇帝の確認を求めたこと、法王領に皇帝が裁判官を派遣したこと等。たとえば法王に戴冠する権利はあったとしても、戴冠後は選挙侯が戴冠後そうしたように、皇帝に従っていた。ローマも歴代の皇帝に支配され、824年 Lotario が父 Lodovico Pio によってローマへ裁判をするため派遣された、と Lodovico Pio 伝の作者が記す。皇帝の選出は全員の同意により、法王の意志によらない。法王が行った *largitas*（寛大行為）の権利はミラノ司教も行使し、最高君主の証拠にはならぬ。*integritate*（全体）ということばも、やはり最高の君主だという証拠ではない。

Cap. VI *Difesa* はローマの貨幣に法王の名が刻印されていることから、法王が最高君主だったと主張するが、法王の名前だけしかないものは、Carlo Magno 戴冠以前の混乱期のもので、それ以後は通常皇帝の名が記されている。また皇帝 Arrigo III が、パドヴァ司教に貨幣の鑄造を許したような例もある。皇帝の名の刻印が「擁護」の義務によると主張するが、その証拠を示せ。公文書にも、ローマでは東ローマ帝国治下に続き、皇帝の名のみ記された例が多い。法王勅書でも皇帝の名が筆頭に記されている。*Difesa* は、皇帝使節がローマで行った裁判が、皇帝権の証明となるために 4 つの条件^④を充たすべきだとしたが、その 4 条件を充たす裁判例は多い。829年には皇帝使節が法王を裁いた例すらあり、単なる「擁護者」とは言えず、最高君主と見た方が妥当である。

Cap. VII Leone IV の手紙、法王 Eugenio II の就任（824年）の記録、Pietro Damiano の『対話』等を見ても、皇帝の至上権は否定されていない。法王方は Niccolò II が皇帝 Arrigo III に特権を与えたことを強調するが、単なる特権ではなく、従来の皇帝権を確認したのである。Lodovico II

も皇帝権を行使している。Eginardo は、Carlo Magno が全イタリアを征服したと証言している。

Cap. VIII Lotario 帝も、ローマを含めた全イタリアを支配した。Leone IV がローマ城壁を修復したからといって、最高君主の証拠にはならぬ。公 (duca) も知事も城壁の修復を行う。Lotario I の墓碑に Qui Francis, Italis, Romanis PRAEFUIT ipsis の文字あり、フランク人と同様にローマ人を支配したことが分かる。同様の例が列挙される。Avvocato は保護し、Imperadore は支配するが、Lodovico II は明白に後者の役割を果たしていたことを、Baronio の証言が示す。Ag-nello はラヴェンナ大司教が総督 (Esarco) の役を勤めたとするが、同様に皇帝が至上権を抜きにして、法王にローマを委ねたことは十分ありうることだ。

Cap. IX この主張に Difesa II は大げさに反応しているが、法王方はもっと情念を抑制すべきだ。カロリング朝以後のイタリア王 Arnolfo, Berengario らの場合も事情は同じだ。Ottone I の特許なるものも、オリジナルが無いだけでなく、状況から考えておかしい。Arrigo II のそれも同様だ。それに皇帝が Avvocato の役割を引受けたからといって、皇帝権を失いはしない。Ottone I の帝位就任前の法王への誓いから、法王の権限が分かると主張されているが、それは Ottone III のものである可能性が高い。仮に Ottone I のものとして、また法王方の言う通り、法王との相談 (consiglio) なしには、ローマで法令 (ordine) を発布せぬと誓ったとしても、皇帝が最高君主ではないという証拠にはならぬ。以前にも皇帝は法王らの会議と相談していた。しかし同意や助言を求めても君主であることには変わらぬ。むしろ君主である証拠といえる。また皇帝は法王領に全く干渉しなかったとする Liutprando の証言から、至上権を引渡したとはいえぬ。Ottone はローマに暴力で侵入したのではなく、暴力からローマを解放した。

Cap. X Ottone I がローマの君主だったとする証人は多い。Rosuita, Ottone Frigingenese 等々がそれだ。Difesa は皇帝が法王に招かれて来たというが、君主であることに変わりはない。Ottone III についても同様の証言が多い。Ottone III は反逆者の手からローマを奪回して、再建した。

Cap. XI 法王を擁護する義務は、フランス王ら他の君主にもある。Arrigo II らの戴冠の模様からも、歴代皇帝が至上権を有していたことが分かる。法王は用益権と統治権のみを有した。Federico I もローマを自分の都市と呼ぶ。Adriano IV は Arnaldo da Brescia に追われてドイツに逃れ、Federico I の助けを求めた。Ridolfo I の証書で譲られたのも、用益権のみだ。法王庁が楯に取る Donamus (与える) とか、Pleno Jure (全権により) とかのことは、エステ家が皇帝や法王から与えられた証書の類にも度々出てくるが、至上権は移らない。

Cap. XII fisco (国庫) の存在も最高君主である証拠とはならぬ。Fontanini 師の手で、大量の証書類が公刊され、法王領内に皇帝 Corrado II と Arrigo III の fisco があったことが分かった。だから法王が camera (国庫) を持っていたとしても、至上権の証拠とは言えない。公も司教も封臣もそれを持つ。法王方はいろいろなこじつけで我々を大げさに非難するが、①彼らはそれによって自らと真理を傷つけ、②領土問題と信仰問題、聖権と俗権とを混同し、③皇帝とエステ家をカトリッ

クの敵とした。しかし我々の主張は異端とは無関係である。異端者 Arnoldo は、聖職者に用益権も統治権も認めていない。Federico I が彼を処刑したが、それこそ彼が最高君主だった証拠だ。Federico I の皇帝権を認めると、分裂派皇帝の一味だとするが、矛盾した主張だ。

以上で第一部が終わる。このように M. は法王領が皇帝権に属した可能性が大きいとするが、何度も断定する気はないと断っている。以下で第二部に入る。

Cap. XIII Carlo Magno の息子でイタリア王だった Pippino が809年にコマッキオを有していた。この年ギリシャ軍がこの市に侵入、フランク族の城代がこれと戦った記録がある。Difesa II は同市が法王領だとして、法王 Leone III の皇帝に援助を求めた手紙を示すが、これはオステティアへの回教徒侵入の際の手紙をすり換えて用いたもの。その証拠(略)。Pippino はラヴェンナに住み総督領を支配。Lotario も同領を直接支配。同帝の領民一覧に同市民の名がある。法王方は、法王 Giovanni VIII の Berengario 王への手紙を楯に取るが、目的語を読み誤っている。コマッキオは、皇帝 Carlo Grasso のころ、その封臣 Marino 伯に治められていて皇帝領だった。

Cap. XIV 9～10世紀、皇帝やイタリア王は何度もヴェネツィアと協定を結ぶが、そこでもコマッキオ、フェルラーラ、ラヴェンナの各市民は、すべて皇帝の臣下とされた。「擁護」ということばが万能薬にはならぬ。法王方でも Dissertatio Historica (以後 D.H. と略) の作者は、Berengario 王らがコマッキオを支配したことを認めた。Almerigo 侯は遺言で同市を自分の所領と考えていたが、Difesa は、同市内にその私的遺産があったのだと解釈。しかしむしろイタリア王から封土として得ていたと考える方がずっと自然な解釈である。

Cap. XV Ottone I もローマと総督領の至上権を有した。同帝のヴェネツィア人との協定でも、コマッキオ人は皇帝の臣下とする。Ottone II、Ottone III 帝時代にも変化はない。後者は999年ラヴェンナ大司教 Leone、1001年新大司教 Federico あてに証書を与えたが、Difesa は前者が Alfonso Ceccarelli の手になった偽文書だとする。その証拠に皇帝はこの時期ラヴェンナに行かなかったとする。しかし皇帝本人がいなくとも証書は出せるし、また皇帝のアリバイもそれ程確実ではない。法王方こそ、偽文書コンスタンチヌスの寄進状に頼っているのではないか。

Cap. XVI Ottone III の1001年の文書について、法王方は書式や内容から偽文書だと嘲笑する。しかし書式(大司教の敬称等)は常に一定とは限らず、内容も修道院に院長を互選する特権を与えているからといって、それほど異常ではない。F. も Farfa 修道院に関して類似の例を示した。それにこの文書は法王庁から出たものである。Arrigo III の文書は本物がエステ家にあるが、Ottone III と同じことばを用いている。

Cap. XVII 1017年 Arrigo II がラヴェンナ大司教 Arnaldo に贈った領地にコマッキオが含まれる。1016年に Arrigo II 帝が反逆者を処分した際の証書がエステ家にあるが、総督領に彼の国庫(fisco)があったことが分かる。1028年ラヴェンナで皇帝使節による裁判があり、皇帝こそ真の君主だったことが分かる。

Cap. XVIII Ermanno Contratto は、1047年 Arrigo III がノルマン公に領地を与えたと証言。同

帝とヴェネツィアとの条約でコマッキオ市民は同帝の臣民とされる（類似例は以下省略）。1063年 Arrigo IV はラヴェンナ大司教にコマッキオを与えている。この大司教は法王にも忠実だった。Arrigo IV はラヴェンナ大司教にコマッキオを与えている。この大司教は法王にも忠実だった。 D.H.は1106年の宗教会議のころラヴェンナが一世紀以上反逆していた、という記録を示したが、それは精神的な問題で、世俗的な問題ではなかった。Gregorio VII を批判して、法王方を怒らせたが、たとえ法王でも信仰問題以外では誤りをおかす。たとえば破門の乱用等がそれだ。Gregorio V の勅書は、皇帝に Venerabile という敬称を付けるが、これは怪しい。偽文書くさい点他にも多い。逆に Arrigo IV の証書には怪しむべき理由はない。

Cap. XIX 1106年から1143年までの5つの法王勅書は偽文書くさい。①突然必要もないのにフェルラーラの領域の境界を記している。②Prisciano の示した他の二つの勅書が偽物で、それに似ている。③Ughelli の示した本物の勅書と大差あり（フェルラーラの教会に財産を確認している点など）。もし万一本物でも、法王方の主張を証明するには弱い。ヴェネツィアの文献で否定されている。

Cap. XX Arrigo V がローマニヤを支配していたことを示す証拠は、1118年の裁判の例など多数ある。ファエンツァ市民が訴えた Matilde とは女伯ではなく、Arrigo V の皇后で、市民は皇帝権に服していた証拠だ。Difesa は、1118年の Gelasio II の法王勅書が、ラヴェンナ公領を同大司教 Gualtiero に与えたとし、D.H.がその後歴代の法王勅書に同様の例を認めるが、だからといって至上権が法王に移ったとはいえぬ。1146年の聖 Bernardo の手紙でさえ、ローマの至上権が皇帝にあったことを認め、皇帝がローマニヤ地方を支配していた証拠は多いと列挙する。

Cap. XXI 1160年 Federico I は、コマッキオを総督領と共にラヴェンナ大司教 Guido に与えた。法王方はこれを非難するが、前任者の例に習っただけだ。1177年、同帝はコマッキオ市民に証書を与えたが、D.H.はそこに境界線が記されているという理由でこれを偽作とする。しかし市に与えた証書だから自然で、1191年の Arrigo のそれにも記されている。法王方が怪しむ原因は写字生の誤りのためだ。1183年のコンスタンツの和の際も、ミラノや法王 Alessandro III でさえ、皇帝のローマニヤ支配権を認めている。

Cap. XXII Arrigo VI の遺言中に、法王のラヴェンナ領有を認めるようにという指示があるのは、用益権に関してのみそうしている。法王 Innocenzo III は、Federico II の幼少につけこんで、皇帝領を手に入れた。Ottone IV d'Este が一部の用益権を回復しようとして破門された。M.Parris の証言あり。しかしコマッキオは法王の治下に移らず、Federico II 帝が直接支配した証拠がある。法王方は署名の差等を理由に偽物視するが、下手な筆写のせいだ。むしろ本物の証拠と言える。

Cap. XXIII Federico II 帝が1220年ボローニャでラヴェンナ大司教 Simeone に総督領とコマッキオを与え、法王らは抗議せぬ。類例多し。エステ家が同市に関係するのは1297年以降で、当時は同市は主にラヴェンナに属した。Federico II 帝は1330年付の遺言で、「皇帝権は確保されるべし」と命じた。

Cap. XXIV 法王方は Ridolfo I の文書を提出し、それが①Lodovico Pio, ②Ottone I, Arrigo II の文書を認めたとする。③総督領内の諸都市に皇帝に対する臣従誓約を破棄させたとする。しかし列挙された都市名のリストにコマッキオの名はない。④法王方は Giovanni Villani が行った Ridolfo I と法王 Niccolò III の関係の説明（皇帝が十字軍に関する約束を怠ったので大幅に譲歩したとする）は、イ. Villani がギベッリーニ党员で^④、ロ. 60年も後に記した上に、ハ. 俗人のたよりない話だからという理由で信じ難いとする。しかしその記述は同時代人でゲルフィ党に属した Ricordano Malispini と一致し、また彼が Ridolfo を好意的に評価しているので、信頼に価する筈だ。⑤皇帝の命令や、法王の手紙で1278年ごろまでコマッキオとローマニアに皇帝権が残っていたらしい。⑥要するに Ridolfo は歴代の皇帝以上のものを譲らず、⑦個々の都市の誓約によってローマニアに皇帝権が広がっていたことが分かる。Ridolfo 帝は最大限の皇帝権を保っていた。⑧法王方には Aventino や Lambecio を研究してもらうよう勧告したい。Ridolfo 帝の証書類は他のそれと違い過ぎるので、検討の余地が大きいのだ。⑨Ridolfo 帝は至上権は放棄していない。⑩私が当時法王は皇帝を追放しようとしていた、と記したことに対し、Difesa は怒り狂ったが、Baronio らカトリックの権威たちも同じことを書いている。D.H. さえ認めている。とに角コマッキオは皇帝を最高君主としていた。

Cap. XXV Ridolfo I の後、Adolfo, Alberto らは時の法王 Bonifazio VIII に認められず、Lodovico il Bavaro も法王 Giovanni XXII と対立して妨害を受けた。Difesa の作者は、我々の Supplica の誤りを4点指摘、たとえば同帝のころ従来の皇帝と法王の一致が地に堕ちたとか、法王が混乱に乗じ領地拡大を策したとかの叙述に憤慨するが、それは事実だ。法王方は、エステ家が当初、フェルラーラを「力で(vi)」^④奪ったとするが、エステ家の同じ文献にはその語はない。むしろ1317年同市民が自発的にエステ家を招いた後、法王 Giovanni XXII が1332年に承認したのだ。コマッキオはそれとは別に1297年と1325年に、同市民が自発的にエステ家に服従し、1354年皇帝 Carlo IV が証書によって承認を与えた。その証書を1221年の Federico II のそれと同じとするのは夢物語だ。以後歴代皇帝がそれを確認し続けた。

Cap. XXVI 法王方は①皇帝からエステ家への授封は疑わしいこと、②同市が皇帝から法王に寄進された以上、エステ家の権利は無効、③法王はフェルラーラの一部としてコマッキオをエステ家に与えたと主張。さらに Difesa は、エステ家の主張なるものを8点（それは Lodovico II から始まる）挙げているが、我々の主張はその内コマッキオ市民の自発的服従、皇帝たちによる授封、時効取得の成立の三点にすぎない。法王による授封はない。法王方による文献批判は細かい筆写ミスの問題だ。

Cap. XXVII Difesa は、エステ侯が Carlo IV に会いにマントヴァへ行かなかったとするが、パドヴァで会った証拠がある。Carlo IV の証書の写しを我々が提出しなかったと激しく攻撃したが、我々は代表者会議にとくに提出しており、ひどい中傷だ。内容に関しても中傷を受けたが、オリジナルが我々の所に残っている。皇帝がエステ家から貢租を受納した例を挙げるが、それは

兄弟が地位を争った特殊なケースにすぎず、貢租が払われなくとも、正式な封土で、むしろその方が普通だった。

Cap. XXVIII 封土である条件に、貢租を払った証換は不要。Fontanini 師の皮肉を受けるのにふさわしい誤りだ。Difesa は様々の難癖をつけるが、むしろ典型的な diploma である。(中略) 1526 年の Carlo V の Alfonso I に与えた証書にも Difesa は文句をつけ、1522年に Alfonso は同市が法王のものと認めたとするが、ちょうどカンブレー同盟の時代で、モデナやレッジョさえ教会のものとされた程異常な時代だった。1535年 Carlo V によって皇帝の権利は再確認され、1594、98 年の証書にも同市の名があり、Carlo V がエステに与えた称号にコマッキオの名がないと、Difesa は大騒ぎするが、Rovigo 伯領の一部となっていた。

Cap. XXIX Difesa は、我々の主張する証書に散々難癖をつけつつ、結局本物とせざるを得ず、それでも至上権は法王に属していたとする。つまりラヴェンナ等の総督領と共に、皇帝から法王に譲られたとする。しかし二つの権利が主張された場合、実現している方が有効だとするのが法の定める所だ。それは *diritto di pompa* (名目上の権利) とさえ呼べない。総督領が Carlo IV 当時皇帝に属していた証換は多い。Guglielmo Hollandiae は1249年、同領の一部を Innocenzo IV の甥に贈り、法王はむしろ喜んでいる。コマッキオも勿論皇帝領で、正当にエステ家に与えられている。

以上 Cap. XIII—XXIX は、コマッキオが皇帝領だったという証明である。以下第三部に入る。

Cap. XXX 次にもう一つ大きな問題に移る。Difesa は、コマッキオはフェルラーラの管轄地 (Distretto) だったとする。Distretto とは *Distringere* (罰する) 権利のある土地。Difesa は、1328年の Giovanni XXII の Breve にその名があるとするが、記載されない。秘密文書などという良い加減なものは許されない。それには証換力なし。Difesa は、古来 *Ducatum Ferrariae seu Comaclum* や *Ferrariam vel Comaclum* と続けて *seu* か *vel* で結ばれており一体だった証換だとするが、反証はいくらでも出せる。*Eugubium seu Comiacum* (ママ) という例があるが、グッピオとコマッキオは一体か。また *Comaclum Ducatum Ferrariae* とコマッキオが前に出ることもある。*Ducatum Ferrariae seu Imolas* とあるがフェルラーラとイモラは一体か^⑨。だから *seu, vel* はあてにならぬ。いずれも結合的 (*coniuntivo*) でなく、分離的 (*disgiuntivo*) な接続詞である。*ducato* とは、城のある町で *duci* という知事を派遣した所だから、Giovanni III はコマッキオも *ducato* と呼んでおり、それも可能。1191年の Arrigo VI の証書は、Difesa の主張とは逆に、Bosio の溝が、二つの都市の境界線を成していることを示している。それは三段論法によって証明しうる。(その証明は後で論じる。)

Cap. XXXI Arrigo VI 以後の皇帝の証書類やその他の文書から見た両市の関係。いずれも両市が別だったことを示す。たとえば Pigna も Bosio の溝が境界だとする。Prisciano の境界線 (略)。

Cap. XXXII 1309年フェルラーラのボデスタがコマッキオ領内の財産を扱ったが、これは条約に基づき、相続財産を扱ったもので、他の例も様々の事情に基づく。両市がエステ家に服属した

時期(1317年と1325年)の時差に注目すべきである。エステ侯のタイトルにコマッキオが省略されているのは、他の多くの地名と同じで、フェルラーラの一部だったからではない。Borso d'Esteは便宜上同市をロヴィーゴ伯領に編入した。

Cap. XXXIII エステ家当主の肩書にコマッキオの名が無いことについて。Federico IIIの通達(decreto, 1452年)のように記されていることもある。同市民がエステ公 Alfonso Iを「我等が公爵(nostro duca)」と呼んだのは、フェルラーラ公領の一部だからではなく、ロヴィーゴやアルジェンタ等明らかに同公領以外の人間でもそう呼ぶ。こういう例は普通だ。またコマッキオ市民にフェルラーラの税法 *statuti delle gabelle* を適用しているのも、*camera ducale* (公爵の国庫)としてである。大体フェルラーラも元は公領ではなく、Borso公の時そうなった。Alessandro VIが同公領を認めた勅書には、Bagnacavallo等小さな町の名はあるが、コマッキオの名は見当たらない。法王領でなかった証拠だ。

Cap. XXXIV 1480年代の法王庁とヴェネツィアの戦争についての主張は、Difesaの思い違い。その和平の際、コマッキオはロマーニャの一部とされる。1484年法王 Sisto IVは、ヴェネツィアによるコマッキオ等への侵入を問題にせず、フェルラーラ包囲に抗議した。コマッキオがフェルラーラに魚を収めたとするが、商売用の贈り物だ。フェルラーラのドゥオモへの蠟奉納も贈り物。両市の憲法が共通していたというのは誤解で、コマッキオは独自の憲法を持つ。ただし、「この憲法の欠けた部分は」フェルラーラのそれに準ずるとされているのを、カッコの部分を読み落としたのだ。同じ規定は、レッジョやモデナにもあった。フェルラーラが首都だったので代表とされたのだ。

Cap. XXXV さらに両市が別であることを示す証拠、I～VII(大体はすでに述べてきたことのまとめなので略)。要するにコマッキオは皇帝権に属しラヴェンナその他に支配された。D.H.がRidolfo Iによって1278年法王への忠誠を命じられたとするが、夢想だ。1297年エステ家に服従するが、1308—9年エステ家の内紛で、ラヴェンナの下に移る。ギベッリーニ党のSalinguerra家に接近したこともあり、フェルラーラとは別の市である証拠。1324年のGiovanni XXIIのエステ家処罰はこの当時の法王権拡大を示す。1321, 1324年の法王勅書はフェルラーラの名前のみを記していて、コマッキオ等には触れない。

Cap. XXXVI 1325年コマッキオは自発的にエステ家に服従、1332年 Giovanni XXIIがフェルラーラをエステ家に与えた。この時差により、一体ではないことが分かる。法王勅書にもコマッキオは含まれぬ。Cronica Parvaにもフェルラーラの境界が記され、コマッキオはその外にある。その他、別の市とする証拠が多い。

Cap. XXXVII 1332年エステ家が法王の代官職(vicaricato)に就任するに当たり、コマッキオは、フィレンツェ、アドリアと共に、エステ家のための保証を行っている。これこそ同市がフェルラーラと別の市だったという明白な証拠だ。相手が法王庁なので、他の二市同様、法王領内になったことをも証明する。1344年にも、モデナ、フィレンツェ、アドリアと共に保証する。モデナ

と同じ立場（皇帝領）だったことが明らか。D.H.の説明（フェルラーラの内部から保証）は苦しい。

Cap. XXXVIII 1357年エステ家はゴンザーガ家その他と同盟したが、条約で地名を列挙。フェルラーラとコマッキオは別々に明記。フェルラーラ領内の地名は記されず。法王代理もこの同盟交渉に参加していた。1371年の Anglico 枢機卿の記録はローマニャの全市名を列挙。コマッキオ訪問の証拠はない。他には記録なし。ラヴェンナの管轄地の都市メルサはそう記されている。コマッキオにその記述がない。さらに法王領だけでなく、その周辺も記すと断っている。エステ家はフェルラーラについては法王庁に貢租を払ったことがあるが、コマッキオについてはない。Vicari in non nullis aliis Civitatibus はきまり文句で、フェルラーラ単独について記す場合もそう記す。

Cap. XXXIX Giulio II がコマッキオでの製塩を禁じた問題も、1540年の Giraldi の手紙などはあてにならぬ。彼らは同じ問題を両方の立場から論じる練習を行うので、信念とは言えない。私が法王は「得手に帆をあげた^⑧」と書くと、Difesa は激しく非難した。彼らは言葉尻を捕えている。私は本当のことを言っただけだ。Giulio II の行き過ぎは不正だ。メッツ司教も批判した。批判者は多い。1598年コマッキオ占領後に、Clemente VIII は同市民にフェルラーラ市民との小麦の売買を許すという小勅書を発す。両市が一体でなかった証拠だ。トゥール会議で、エステ家はコマッキオの権利を認められた。Giulio II は1511年の小勅書でモデナのコマッキオ返還要求に答えている。

Cap. XL 1522年、エステ家は Adriano VI との間で塩を作らず、作らさぬと約束したが、義務によるものではなく、交換条件に基づく。だからコマッキオだけではなく、約束は全エステ領におよぶ。この譲歩は、「封臣は産物 (frutti) を処分しうる^⑨」という権利に基づく。以前ヴェネツィアとも同様の条約を結んでいた。Carlo V はエステ家のコマッキオへの権利を確認。Alfonso I は全世界に同市に対する権利を宣言。天の恵みで Leone X が1515年6月、Alfonso I にあてた勅書が見つかる。その中で Leone はコマッキオにおける塩以外の一切の権利を放棄していた。Difesa が反論に用いた二つの報告は、公衆の批判に耐えぬ。

Cap. XLI 1539年 Paolo III と Ercole II d'Este との協定は、Alessandro VI のそれと同じとされる。Alessandro VI のそれにはコマッキオは入らず、et non aliter という文句で、変更を禁じた。Difesa は quibuscumque Civitatibus という複数形で、コマッキオを含むとするが、もし我々がこんな詭弁を弄したらどんな反論を食うことだろう。Ercole II は他の都市を法王から得ていない。D.H.の方が両市を別としている点はましだ。この Ercole II より、「コマッキオ領主」の称号を用い始めた。D.H.はメディチ家の Cosimo I との序列争い（1542年）のせいだとするが、フランス等に散在するエステ領を明らかにするための変更だった。法王庁は新しい称号を記した1539年以降の系図にも抗議をしなかった。エステ家の大使 Faleti は1558年、ローマの枢機卿会議で演説した時、コマッキオは法王領だと述べたが、それは彼が Ercole II の許しなしにやったことだ。Ercole II は丁度同じ1558年に、Ferdinando I から、同市を与えられている。ヴェネツィアでの Faleti の演説草稿の出版もエステ家の許可を得ていない。コマッキオ領内の財産争いを法王庁の

控訴院 (Ruota) に持ちこんだことも、法王領の証明にならないと権威者はいう。

Cap. XLII Difesa は、我々が Niccolò d'Este の遺言の一部を隠しているというが、全部示した。そこでは、フェルラーラ以外は、法王領の外から得たとされている。二市を合併した時、たとえ一方が他に含まれても、二市は独立しているのが普通だ。distretto と territorio は、学者にとっては別で、distretto に他の市を含むのは稀である。歴代のエステ家君主が発した許可の類、たとえば1460年 Borso が確認した通達に、「フェルラーラのブドウ酒を望むだけコマッキオに運ぶことを許す⁶⁹」とあり、それに類したものが多いが、これは両者が一体だった証拠にはならぬ。むしろ逆で、これだけのことに一々許可が要ったのは、両市が別個だったからだ。

Cap. XLIII 両市は、1598年 Clemente VIII によって始めて統合された。それは1598年の勅書(冒頭20行引用)に「C.市はF.市と共に法王庁に返還された⁷⁰」とあることから明白だ。管轄地なら記入の必要なし。実際この時新たに編入された地域のみが記されていて従来の地域は記されていない。第一タイトルにも Ducatus Propagatio (公領の拡大) ということばがあり、これは Difesa のような印刷屋の仕事ではない。この後フェルラーラ市民がコマッキオその他のポデスタ等を選ばれることになったので、この勅書でその旨が公表された。フェルラーラでコマッキオも含む裁判所 (ruota) が開設されたのも、1598年5月のこと。1598年 Clemente VIII がコマッキオに対して発した、フェルラーラから小麦やブドウ酒を自由に運ぶことを許可する旨の小勅書も、それまで両者が別個だったことの証拠だ。Artusio らもコマッキオとその他の地域は法王軍に占領されたと証言している。

Cap. XLIV エステ家にコマッキオに対する時効取得の権利があることの再確認。法王には武力はないが、ベン、破門等の手段がある。それまで歴代の法王は、コマッキオをフェルラーラと別として、エステ家の権利を尊重していたし、1510年に Giulio II がコマッキオに対して権利を主張したが、Alfonso I ははっきりと反論した。Giulio II, Clemente VII らの主張はしりぞけられ、かえって皇帝権は確認された。法王軍による占領後も、1598年 Ridolfo II は、Don Cesare d'Este に対してコマッキオが封土であることを確認している。

1643年に Ghino が、Don Cesare は皇帝に秘密でコマッキオを法王に譲ったと記したが、法王庁が皇帝権を意識していたことを示す語に落ちた嘘だ。秘密会談の痕跡はない。Ridolfo II の抗議は、Palazzi, Morosini, Contarino らも証言。また法王軍による占領については、公証人 Martini が記録している。Difesa は武力による占領ではなく、司教 Giraldi が実権を奪ったとするが、我々の表現がそれほど「真実を特定の目的のために歪めた⁷¹」とはいえない。Difesa は、皇帝が Raimondi 伯を派遣して、併合を祝ったとするが、同伯はエステ家を守るために派遣されたもので、皇帝は同市の喪失をなげく。

Cap. XLV 1697年、皇帝 Leopoldo とその助言者 Andlern がコマッキオの返還を要求。Leopoldo 帝は敬信の念の厚い人だが、1697年の勅書で皇帝領回復を命じ、コマッキオの名を明記。Giuseppe 帝が回復、Carlo VI もそれを保持して今日に至る。昔の寄進による権利は不十分で、そんなもの

で占領できる都市はない。時効取得は有効だ。だから Clemente VIII の行為は不当だ。奪回は正当だ。Leopoldo 帝は自発的に勅書を出した。エステ家の煽動ではない。

1598年のヴェネツィアにおける法王庁の行為に関する評判は、Graziano によって法王庁の国務長官あてに報告されている。単なる広場の噂ではない。アドリアもコマッキオと同じ立場にあったが、ヴェネツィアに与えられていたので奪われなかった。これは信仰の問題ではないので、法王も批判されうるし、教権といえども絶対的なものではない。1597年以降の法王領へのコマッキオ併合は不当で、抗議がなされているため、時効取得の権利は生じ得ない。

第三章 コマッキオ論争におけるムラトーリの方法

以上多くの紙数を割いて紹介した文献 8. に対して、F. は結局反論を記さなかった。その出版後 1720 年に F. が発表した *Risposta*『返答』(文献 10.) も、M. の文献 6. に答えたただけだったため、M. の甥の Soli は、叔父の勝利を宣言した。勿論相手の F. はそうした判定を認めなかったに違いないが、文献 8. に接した我々は、それがかなり説得力のある批判を F. の文献 3. および 7. に対して加えていて、F. の主張の基盤であるコマッキオが古来フェルラーラの管轄地 (*distretto*) であったとする説の不確かさを示すと共に、エステ家にコマッキオに対する時効取得の権利が生じていたことを証明することに、ほぼ成功しているという印象を受けるのではないだろうか。本論では、以下で簡単に文献 8. における M. の論証方法の特性を検討しながら、その説得力の由来を辿ってみることにしたい。

この論争では、M. が当初出遅れたことが、結果的には却って幸いしていると言えそうである。つまり、相手の主張が十分出尽くして、その全貌が明らかになった所で、これを徹底的に批判するという形式が効を奏している。M. がある程度このことを意識していたことは、文献 8. の序文の中で「もし彼が余りにも急ぎ過ぎたために生じる悪い結果を怖れないとしても、私はそれを怖れる」とし、「私は真理と正義のために十分良く (*sat bene*) 答えることができた場合には、ローマ側の部厚い三巻に対して、十分早く (*sat cito*) 答えたとと言える^⑤」と記したことからも明らかである。しかし勿論単に後から論じたから説得力があったというわけではなく、また M. の性格から考えても選んでそうしたわけでもなさそうで、やむを得ずそうした立場に追いこまれながら、徐々に態勢を立て直して行き、その間に説得の仕方を模索して、ようやく『詳細な解説』に到達したと見なす方が妥当であろう。

彼の論証において、先ず指摘できるのは、理論的側面の微妙な平衡感覚である。先にも触れたが、この論争は領有権の根拠をめぐる、様々な法的理論的論争を引き起こしうる性格のものであったが、ほぼ終始一貫、歴史的根拠をめぐる論争で終わっている。それは F. の最初の論文にも原因はあったが、それを受けて立った M. が、さらにそうした傾向を助長させて、一定の枠内から出ようとしなかった点に負う所が大きい。その点で立場上当時北ヨーロッパで発展しつつあった新

しい理論に対して、それ程積極的に学び得たとは考えられない F.の方が、むしろ可能な場合には、進んでそうした新しい理論的成果を採り入れて、自説の補強のために利用していると見ても差支えなさそうである。たとえば F.は文献 3.で Grozio の『戦争と平和の法』の一文を引用⁵⁾、コマッキオが Giulio II 以来法王庁のもとと見なされながら全く抗議がなされなかったので、皇帝によって放棄されたと見なすことができると主張する。また文献 6.では、Pufendorfio (プフェンドルフ) の「カールとかオットーなどに付されたローマ皇帝位とは、他ならぬローマ法王庁の擁護 (Advocatio) もしくは保護 (Protectio) を意味するとされていたもの (権威のことであろうか) を、時の経過と共にゲルマン人たちの君主が自分の名に付したものである⁶⁾」という一文を引用しているのがその実例である。

それに対して、M.はそうした権威からの引用を余り行おうとしない。特に自説の大まかな枠組の理論的根拠作りに当たっては、実務的な性格が濃く感じられる「時効取得」の権利に頼り、さらに伝統的な封建法学者の学説を手短に引用するに止めている。これにはたしかにやむを得ない事情もあるのであって、このことは F.の文献 10.の Saggio VI の所説からも理解できる。そこで F.は Grozio に代表される非カトリック教徒の学説を自説の補強に用いた理由を説明し、法王庁が異端者の説を引用した場合、それが異端者であるが故に一層信頼に価するのだと述べている。良く考えて見ると、M.もしばしば記した通り、直接信仰に関わらない問題である以上、カトリック教徒であろうとなかろうと説の当否には関係ない筈だが、それにもかかわらず法王庁相手の論争においては、特に M.のように一方では正統のカトリック司祭であることを標榜している場合、非カトリック教徒の学説は利用しにくかったこと、すなわち迂濶に利用すると異端者として攻撃される危険が十分あったし、また法王庁が利用する場合のような効果も期待できなかった、という事情は容易に想像しうるであろう。

しかし M.がやむをえずそうした非カトリック圏の理論的成果の利用を抑制もしくは禁欲したと見なすわけにいかないことは、「法律の専門家たちは、現在のケースに法王側の弁護人が引用している Pufendorfio や Grozio のことばが全く適していないらしいということが分かるだろう。だから、彼は自説のために異端派の著者たちから引用する必要はなかったし、また事は宗教とは何ら関わりのない問題だとはいうものの、我々が彼らから受けるあのひどくいやな感じ (grande abborrimento) を、彼が自分から望んだとはいえ、必要もないのに味わうことなどなかったのだ⁷⁾」という一文によって察知される。おそらくこの文の真意は、その必要もないのに権威の文章で箔をつけようとしている F.の態度を皮肉のためだったと解釈することが許されるはずであるが、ここで用いられた「ひどくいやな感じ」という表現からも、少なくとも M.には進んで Grozio らの業績を自分の作品の中で利用するつもりは全くなかったと推理しうるのではないだろうか。しかしだからといって、M.が法的根拠の理論面において関心や知識が乏しかったなどという推測は決して許されない。特に論争に関係の深い皇帝権と法王権の対立をめぐる問題に関しては、『考察』から『詳細な解説』に至る 4 年間を通して、その知識が深化された、それどころか深化せざるを

得なかったことが、Bertelli が幅広く紹介した通りパルマとピアチェンツァおよびコマッキオの皇帝権擁護のため、Struve, Museo, Jaeger, Brennero,あるいはさらに大胆に法王の俗権を否定した Lynker らアルプス以北の学者たちや、Caroelli, Colla らミラノ政府の官吏、さらに Sassi, Cavecchi 等の論文が相次いで現われ、^⑧それらとの対応なしには論争を展開しえなかったことから容易に想像できるはずである。今挙げた論客の大半は、ほぼ皇帝とその宮廷の味方として論じており、M.の立場とは似ているが微妙に異なっている。特にアルプス以北のプロテスタントにとっては、Arnaldo の異端的な主張など抵抗なしに受け入れることができるが、M.自身には許し難いものだった。Bertelli はこうした事情を、「モデナ公領の特殊な地理—軍事的状況と、M.が公の大臣らと分かち合っている政治的責任とが、エステ家の外交よりも皇帝の外交にはるかに近い、他の反教権的論争家のそれとは異なった立場を、M.に取らせるに至った」^⑨と説明している。だから、たとえば Lynker の主張などは「カトリック教徒たる皇帝陛下や、いとも篤信なるエステ家のために書く者にはふさわしからぬ、明確な異端」^⑩として斥けねばならなかった。しかしこうした現実的で一見妥協的な立場が、必ずしも不利に働いたわけではないことは、Bertelli の「だがそうしたことは穏健な立場を予想させるが(中略)、まさにエステ公領の政治こそ、モデナ、ミラノ、あるいはアルプスの彼方の同僚たち以上に、豊かで、近代的で、開放的で、管轄区にしばられた文化の枠組から束縛される度合いの少ない立場に、L.A.M.を置いたものなのである」^⑪という一文からも理解しうる。要するに M.はこの文献8.において、単なる論争者の立場を越えたわけだが、すでに見て来た通り、それは何らかの革命的な理論とか個性的な主張などを通してではなく、むしろ実務上欠かせないものとなっている権利の概念とか、伝統的な法理論を基礎にした穏健な判断力の行使を継続することによってであった。Bertelli は、絶対主義的法学者が否定した人民の意思を M.が比較的重視している点を強調している^⑫が、たとえば F.が文献3.の第二部で行った人民による自発的「服従(dedizione)」の越権性へのきびしい非難に対して、^⑬M.は正面切って明確な反論を行ったことは一度もないように思われる。たしかにそれを記した際の M.の心中には、この事実がエステ家にとって有利であるという判断が働いていたことは、確実である(武力侵略に比して有利なことは何人にとっても明白な筈だ)けれども、むしろその記述を読む者には、コマッキオがエステ家に入るに至った契機なので、どうしても省略することが許されない歴史的事実として、何らの価値判断も加えずに淡々と記されているという印象が否めないのである。たしかに、住民の意思の問題は、一世紀半後のリソルジメントにおいては、サヴォイア王家による国家統合の口実^⑭にさえなり得た程の重大な問題であるが、M.にはその点について強調しようとする意図は少なくとも字義上はほとんど認められない。先に見た通り Bertelli などはこの点で F.に対する M.の新しさを認めているが、実際にはこの問題に関する論争を避けて、ただ事実だけを、その必要箇所ですべていて、却って点数をかせいでいるのである。先に見たように、アルプス以北の尖鋭な主張とは一線を画し、今見たようにむしろ成可く法理論上の激しい論争は避けている点から、理論の面では、M.の記述には、微妙な平衡感覚に基づく、基本的にはむしろ保守的

な、一種の自己規制が作用していると見て差支えないであろう。

たとえばこの論争において、M.が中世のスコラ哲学において多用された三段論法を、二度にわたって厳密な形式で論証に用いているという事実も、いわば今述べた M.の理論的側面における、保守的と呼ぶことさえ可能な慎重さや抑制の現われと見なしうる。その一例は文献13.『簡潔な解説』の末尾で用いられたエステ家の「時効取得権」の証明^④、もう一例は文献8.第XXX章の末尾における1191年の Arrigo VI の証書に基づく、フェルラーラとコマッキオの領域は別だったとする説明^⑤である。後者の例を見ると、F.がその前に Arrigo VI の証書は、フェルラーラの境界が「ボジオの地溝 (Fossa di Bosio)」だと規定したことを楯に取り、その内側にコマッキオも含まれていると主張した^⑥ことに対して、M.はその地溝が実はフェルラーラの領域とコマッキオの領域との中間を走っているという事実を指摘して、同証書の境界の規定は、まさに両市が別個であったことの証拠になると反論した箇所に当たり、「法王庁側は Arrigo VI が管轄権もしくは領域（中略）を与えようとしていることを認める。これが命題の大前提である。疑いないことは同証書はその管轄権を、コマッキオの領域とフェルラーラのそれとを区分していることが明らかとなった Bosio の地溝まで達するとしている。以上が小前提である。だから Arrigo VI は、フェルラーラの政治的領域は Bosio の地溝を越えてはならないという意図を持ち、またそのように命じており、そのこちら側に止まってコマッキオ領を含めぬことを望んだ。以上が反論の余地なき結論である^⑦」という文章より成っている。一見して分かる通り、いずれの例も別に三段論法など用いなくとも明白な主張で、結局レトリック^⑧として用いられた強調用法だが、こうした中世以来の伝統的論法をあえて用いていることから、M.の論証法はむしろ当時としては陳腐な程（私の知るかぎりこの論争で F.はこの種の三段論法を一度も用いていないように思われる）常識的なものだったと考えても大きな誤りではなさそうである。こうしたシンプルな論証方法と表裏一体を成しているのは、証拠の提示、そしてしばしばその羅列であって、たとえば文献2.では Laura が Alfonso I の正妻であったという主張を裏付けるために、Cap. LXXXV では9件、Cap. LXXXVI では同じく9件、Cap. LXXXVIII-XCII で12件、Cap. XCIV-XCVII にかけてさらに9件と気が遠くなりそうな羅列を重ねた挙句、文献3.において、ごますり詩人の讃辞など何の価値もないと、F.から一笑に付されているのは、その典型的な例だといえよう。いわば三段論法に還元しようような単純な論理に裏付けられた、それ故いずれも明快な命題が、延々と直線的に続くのが M.の著書の特長であるとも言える。たとえば同時代人の Vico の『新しい学』が、複雑な論証が重なりあった奇怪な巨塔のごとき印象を与えるのに対して、M.の数々の著作はいずれもシンプルな平屋の建物のごときまでも延びているような感じを与えるのも、そのような特長の現われと言えるかも知れない。M.が書き残した著書の持つ単純な堅牢さには、Vico の魅力とは異なった、しかしそれなりに棄て難い魅力があるのだが、M.のそうした特質は生来的なものであるとは言え、この論争によって一そう助長されたことは否定できないものと思われるのだ。

ところで、本論争において M.らしさが最も現われていると共に、彼の論理構成の強力な基盤と

なったのは、彼がコマッキオに関するエステ家の権利に関して、フランク族の皇帝時代以来の約500年間を思い切って削除した点にあるのではないかと私は考える。エステ家はドイツのヴェルフェン家ともルーツを同じくするとされる由緒ある家柄なので、その古文書を探せば、もっともらしい資料をひけらかすことはあるいは困難ではなかったとも思えるが、M.はそうした古文文献はあっさりと放棄して、比較的確実な文献が残っている1297年以降に、エステ家とコマッキオ市との関係を限定し、特に時効取得権を証明するために、皇帝によって正式に承認された権利の起点となる年を、Carlo VIの証書の存在を基にして、1354年というF.の構図から見るとかなり後代に当たる時点に設定する。このように証拠となる文献を厳密に要求し、もっぱらそれに基づいて論証を進めていく方法は、近代の歴史学の文献実証主義と呼ばれているものに極めて近いと見なしうであろう。M.が自分でそうした方法を発明したわけではなく、フランスのベネディクト教団のMabillonに代表される聖モール学派で発達した方法を、最初はBacchiniから間接的に、後には文通によって直接的に学んだ古文文献学の方法^⑧の一展開であることは、今さら指摘するまでもないが、それにしても数世紀にわたる主家のコマッキオとの関係を、思い切り良く切捨ててしまうことは、やはり余程方法論上の確信が無い限り仲々できないことのように思われる。こうした切捨てが文献2.においてすでにはっきりとした形で行われており、準備不足だったとはいえ、M.の基本構想そのものは、1708年当時はっきりと決定されていたことが分かる。どうやらF.はこうした応待に肩すかしされたような印象を受けたらしく、文献3.の第二部で、相手が利用してもしない854年のLotario Iらの証書までさかのぼって、その問題点を指摘し、偽文書であることを主張するが、M.にとっては痛くも痒くもない批判であった。以後のF.のエステ家の系図の古い部分の批判も同様で、F.が当初エステ家方が行う反論について、どのような予想をしていたか推定することが可能である。F.はM.の行ったそうした大幅な切捨てを、当初M.の古い時代に関する自信のなさの現われだと取った可能性は大きい。しかし論争を繰り返す内に、M.が自らに課した文献実証主義の桎梏が、結局はそれと全く同じ厳密さで自分の主張にも適用されざるを得なくなること、しかも彼の行っている主張が、たとえば817年のLodovico Pio帝の憲法のような古い文書を基礎としているために、その信憑性は一そう証明することが困難であることを悟らざるを得なかったはずである。それよりも先ず、論争それ自体の方向づけが、F.がおそらく漠然と予想していたような、古い時代のいずれも根拠のあやしげな権利に関する応酬（ここではF.のレトリック的才能が十分に発揮される筈であった）の方向に発展せず、文献の真偽に関する客観的で厳密な学問的究明に収斂して行くことを予想したに違いない。といっても、F.は文献学者としても当代一流であり、それなりに見事な応待をしてはいるのだが、将来イタリアの古文文献に関しては古今未曾有の知識を持つと評価されるに至るM.のような超一流の論敵に対しては、やはり途中で息切れせざるを得ない。M.が論争の当初に行ったエステ家の権利に関する数世紀分の切捨てには、これだけの意味があり、戦術的後退として十分効果があったことが認められるであろう。またそれだけの準備をして犠牲も払っている以上、その方向に相手を誘導するのも当然であるこ

とが理解できよう。

後でも触れる通り、本論争においては、F.の方が通常はるかに感情的で激しいことばを用いており、M.の方が冷静な態度を保っているのであるが、そのM.が珍しく激しい口調で相手のことばに反撃している箇所がいくつかある。その中でも特にきびしく相手の言い分を批判していると感じられる箇所の一つは、Difesa II がエステ家の Alfonso II は皇帝の宮廷あてに秘密文書を送って、自発的に自家の持つコマッキオに対する権利を打切るように皇帝に要望したと記した^⑩ことに対する批判である。M.は「だが我々の側からは、そのような文書を否定する。また Cato (秘密文書の作者とされた人) がそんなものの作者だったことも否定する。世界中のどんな法廷であろうと、そのような雑記帖のたぐいや、まとももない偽物の文書など、何の値打もないことは誰でも知っている。もしそんなものをまともな裁判で問題にしなければならないのだとしたら、いたる所でいくらでも用意することができるだろう。エステ家は決してそんな風に語られるように命じなかったし、また今主張されているような秘密文書の証拠など何も残っていない。エステ家の重臣たちは(中略)、『領有権』の弁護者の度胸を驚くべきものと受け取っている^⑪」として、真向から否定すると同時に嘲笑する。このようなきびしい反応は、M.の方法からすれば当然で、文献をお互いに公開し合って、共に検討するという原則が、実態の不明な秘密文書をめぐる臆測を一度でも許したりすると、成立し難くなるために他ならない。

さらに一例を挙げると、F.が Difesa II, Cap.LXXXIII において、「(エステ家側は) ローマ(の代表者会議)では、そうしたオリジナルの証書(investiture)は一度も示さなかった^⑫」とか「全体が忠実に印刷された写しを見るだけでも十分ではないか^⑬」と、まるでエステ家にはオリジナルな文書が一枚もなく、その写しすら満足に提出できないでいるかのように記したのに対する反撃も、そうした箇所に当たる。M.は「コマッキオに関する古い証書はローマの代表者会議のまさに冒頭に、その写しが法王庁の高官たちに提供された(後略)ことを知ってほしい」とし、「だからそれによって、我々の義務が果たされたことは万人に分かる^⑭」と反論している。さらに提出された写しが疑わしければ、代表がモデナへ来てオリジナルの文書を確認めたらどうかといい、「その後で彼は帰国して、まともな言い分の乏しい人間のために道理の代役を果たし、論議の焦点に関して彼が正しいと信じさせるのには何の役にも立たない、そうした長口舌で読者を脇道へ引っぱり回すのに精を出し給え^⑮」と相手を皮肉る。こうした辛辣な口調も、M.がまさに証書が残っているという事実を基礎として、彼の主張を構築したことを考えると、十分納得しうるであろう。今挙げた M.の筆鋒が特に鋭くなった二つの箇所の内、前者では秘密文書という得体の知れない、内容の証明の仕様のない逃げ道を閉ざし、後者では自分たちの文書への疑いを晴らして、いずれも文書と関係しているのは偶然ではなく、共に文献に基づく論証という彼の方法にとって、その根幹に関わる問題だったために他ならない。しかし通常の彼の筆緻はそれよりもずっと柔軟で、余裕があった。

たとえば、彼のような方法論に立つ場合、相手側の主張にとって最も重要な文献は、その中に

コマッキオという地名が明記されているという817年の Lodovico Pio 帝の『憲法』であり、これが偽作であるということが明らかにできれば、相手の主張はかなり弱くなることが期待できる。F.もその点を心得ていて、文献10.ではこの文書の肯定者と否定者の一覧表^⑩を作って、前者42人に対して後者がわずか6人だからこの文書を偽作とするのはほんの少数意見だと反撃して再び防御している程である。だから、すでに前章で私が要約した8つの理由を挙げて、この文書を批判した部分 (Cap. IV 全体と Cap. V の一部) は、いわば攻防の一つの山とも言える箇所だが、特に精密な論理が見られるわけでも、鮮やかな手口が用いられているわけでもなく、むしろ綿密に当時の状況と照合したり (理由③④⑤)、同文書の写本 (オリジナルはない) を比較したり (理由①)、他の文書の形式 (理由⑥) や内容 (理由⑦⑧) を調査した結果に他ならない。さらにそれ以外に、この時代の精神的風潮や史実に関する Pagi や、Lodovico Pio の伝記作者らの証言が加えられて、偽作説を補強する。上述の8理由中、その⑥の書式や用語に基づく主張はやや専門的だが、他は材料さえ集めれば、素人にでもできそうな、常識的判断を根拠とする推論で、おそらく F.はこの程度の理由に脱帽する気にはなれなかったに違いない。しかし一見穏健で常識的な意見の積み重ねが、時代の風潮から考えた結果、Gregorio VII 時代の偽作ではないかという、意外に大胆な推理と結びつくと、案外強力な破壊力を発揮している。

推論の仕方が原則として誰にでも分かるものであるのと同様に、その基盤となる資料も、後世の偽作でさえなければ、取りたてて権威ある公文書ではなくとも、M.に取っては有効な証拠となる。勿論それを用いる場合に、自説にとって有利か不利かという計算がなされなかった筈はないのだが、F.が用いた秘密文書に対して M.が辛辣な批判を行ったように、M.が用いた G. Villani の『年代記』を、F.が激しく攻撃したことは、^⑪両者の資料に対する考え方の違いを端的に示していると言えるかも知れない。Difesa I は、M.がこの作者を利用して、皇帝 Ridolfo が十字軍に関する法王 Gregorio との約束を守らなかったのを、破門されるのを避けるため、Niccolò III と教会に気前よく寄進した、という説を紹介したことに対して、「Giovanni Villani のたわごと (ciance) なんか、何の考慮にも値するものか。彼は彼が属するギベッリーニ派の偏見と、彼の時代の偏見とに従って、60年もの後に (中略) それを書いたのだから」とし、さらに「何らかの世俗人の思いこみ (passioni) よりも、公の文書の方にずっと信頼を寄せねばならない」^⑫として、彼の『年代記』を利用した M.を叱りつけた。上述の三つの批判の第三点に対して、M.はその通りだと認めつつも、Villani の証言は、当時の公文書の内容とも矛盾していないと弁解し、前の2点に関しては、Ridolfo 帝と同時代人だった、そしてゲルフィ派だった Ricordano Malispini の記述とも一致するから、信用できると Villani を弁護^⑬している。実はここで M.が、F.自身も Villani を利用^⑭していると反論しているので、F.も自分が攻撃している程、内心ではこの年代記作者を軽蔑していなかったとも考えられ、いわばあくまで建て前の問題に限られるわけであるが、M.の方がより幅広く、柔軟に、できるだけ歴史の実態に近づこうとしていると見なしうるのではないだろうか。それに較べると、F.の態度の方が固苦しく、相手の主張を否定することにのみ汲々としているという印象

が否めないであろう。

そうした態度の違いを最もはっきり示しているのは、M.が必ずしも完全主義を取らず、自分に不利な事実を率直に認めているという事実である。M.にとって立場が弱くなるのは、法王庁が力を増し、エステ家が様々な混乱を体験した16世紀以降で、その勢力の低下と共に、エステ家の家臣ですら自家の権利がはっきり分からなくなったことを認めている。彼はその状況に関して、*Supplica*で、「法王庁は得手に帆をあげて (*godea buon vento*)、モデナやレッジョに関しても同じことを主張した^⑧」と記したため、*Difesa II*の中でF.から「我々の集団において前代未聞の誹謗を浴びた^⑨」というきびしい攻撃を受けねばならなかった。それに対してM.は、「これらのことばは、単に法王庁の武力および世俗的君主としての法王が、この時期にとっても繁栄を享受したことを意味している^⑩」と弁解しているが、このように、法王庁側にはいくらでも難癖をつける材料がころがっていたことが理解できるだろう。こうした難癖に一々応待しながらも、M.はそれに溺れてしまうことなく、歴史の実態を明らかにしようとする姿勢を何とか保ち続けていて、たとえば *Cap. XLI*において、エステ家の大使 *Faleti* が1558年、ローマの枢機卿会議で、無知のためコマッキオは法王庁から与えられているという趣旨の演説を行い、おまけに草稿を *Ercole II* の了解もなしにヴェネツィアで印刷させたという事実をあっさりと認める^⑪。しかしそれは、エステ家に途中から採用されて事情にうとい *Faleti* が勝手にやったことで、同家の了解は全然得ていなかったとした後、その彼ですら、コマッキオはフェルラーラと別の管轄地だとしていてと反撃した上、偶然同じ1558年の内に、*Ercole II* が新皇帝 *Ferdinando I* からコマッキオの証書を確認されているので、*Faleti* のミスであることは明白だとM.は主張している^⑫。論争である以上、最終的には自説を通して、一応各時代の事情を具体的に把握しようとする態度が認められることは否定できないであろう。

F.とM.との本論争に関する著作を読み較べる時、その大きな違いの一つは、F.が概して自説を一個の論文の形で、いわばモノログとして書き進めるのに対して、M.が複数の読者との対話を重ねながら、一種の対話のような形で書き進めている点にあると言えるであろう。たしかにF.もこれらの著作を一応書簡体という形式を取ってはいるのだが、それはあくまで形式であって、むしろ堂々たる学術論文を目指していると見ても差支えあるまい。

そうした違いの一例を挙げると、F.は「だからまた *Aistulfo* 王は、*Nonantula* 修道院長で、自分の妻の兄弟であり前 *Friuli* 公だった *Anselmo* に対して与えた証書の中で、まるで二つの市が一体であるかのように、*Ferrariam vel Comaclum* と記した。法王たち、またエステ家の高官が認めた通り、皇帝たちも、*Lodovico Pio* のそれに始まる教会あての皇帝勅書において、常に *Ferrariam*, *Comaclum* の順で記し、たとえコマッキオがラヴェンナ大司教の治下にあった時代でさえ、むしろラヴェンナの方がフェルラーラよりもコマッキオに近かったにもかかわらず、決して *Ravennam*, *Comaclum* とは記さなかった^⑬」といった調子で書いている。ところがこれを批判した箇所のパラグラフで、M.は「ではローマ側の弁護人が果たしてコマッキオがフェルラーラの管轄

地だったと示しているかどうかという検討に移ろう (Passiamo a vedere)。(中略, F.の示した実例を紹介した後) それにしても, こんな学者に対して, もし誰かがこんなたぐいの思いつきを述べて, この場でこんな取るに足らぬ学説をひけらかしたとしたら, 彼は一体どうなってしまう, どんな返事をしたことだろう。コマッキオは昔も今もフェルラーラの領域あるいは公爵領と隣接していた。だからいつもフェルラーラの直後に呼ばれた。Ferrariam seu Comaclumあるいはvel Comaclumは, その seu (又は) や vel が接続的 (congiuntiva) ではなく分離的 (disgiuntiva) に用いられている以上, Ferrariam & Comaclum という意味以外の何ものでもない。まさに (F.が引用した) Anastasio 自身, 『Stefano II 伝』中で, Callum, Lucolos, Eugubium, seu Comaclum と記すが, グッビオとコマッキオが同一の都市では絶対ありえない。(以下同種の例を挙げて反論を重ねた後) だから読者よ, 見て下さい (veggano i Lettori), コマッキオの領域, 支配圏, 管轄地は, 昔もやはりフェルラーラのそれらとは別だったことを証明することにしか役立たないこうした論議が, 反対者にとって有効であるかどうかを^⑧と記している。同じテーマを扱いながら, F.と M.とでは文章の調子自体かなり違っていることが分かる筈で, M.の文章には, 悪く誇張して評すれば大道香具師のような所があって, たえず読者に呼びかけながら, 問題点をクローズ・アップして見せる。M.研究の大家 Falco は, M.の大著『イタリア年代記』を評して, その語り口が素朴であり, 「その中には狡猾で庶民らしくふるまい, いくらか粗野で露骨な機知を弄し, 豊かで色彩豊かで傍若無人な逸話を無遠慮に語ってやまない人間ムラトリーがしょつ中姿を現わ^⑨」すと記したが, すでに本論争における M.の論じ方にも, 多少遠慮深いとはいえ, そうした人間 M.の片鱗が十分にうかがえるはずである。Falco はそうした語り口こそ, 内容そのもの以上に Gaetano Cenni 修道院長ら同時代の批判者を憤激させたとするが, まさに論敵 F.を怒らせたのも, M.のこうした, 悪く言えば大道香具師に似ているとも言える語り口にあったのではないだろうか。後年 M.は法王庁との関係を改善するが, にもかかわらず Michele Monaco が明快に論じた通り^⑩, ローマの一部の知識人との関係は, 生涯を通じて陰悪なままであったとされている。それはおそらく, こうした読者を問題の渦中に絶えず引き込もうとする M.の論じ方にも原因があったのではないと思われる。要するに M.はこの論争において必要以上に楽しんでいて^⑪, そのことが論敵を一そう憤慨させたのである。そういえば, M.はこの論争の途中で, もう一つ大きな楽しみを見出していた。それは言うまでもなく, 文献発見の楽しみで, 自説の補強のために適した資料が発見できた時の喜びは, 煩瑣な論証のわずらわしさを補って余りあるものだったようである。たとえば製塩をめぐる問題で, 法王 Giulio II の要求は, この法王が法律を無視して行った個人的逸脱だと主張する際, それを補強する証拠として, 次の法王 Leone X が Alfonso I に与えた法王勅書を示しながら, 「聖なる摂理は我々が1515年6月22日付の Leone X 自身による法王勅書の原本を見つけ出す (troviamo) ことを望み給うた^⑫」と記しているが, 短いながらも, 文献が見つかった喜びが伝わってくる一文ではあるまいか。

折角このように証拠となる文献を集めて, 問題点を示し, 読者の確認をうながそうとしても,

相手が余りにも教会に帰依しすぎていては、反撥を受けるだけである。F.の方では信仰心の厚い人々に期待して、たとえば例のカノッサの屈辱事件の主役である Gregorio VII について次のように記す。「いとも聖なる法王たちが、狂暴な分裂派の人々や対立法王に席を譲り、迫害され、蹂躪され、抑圧され、追放されていた——まさにその通りのことが聖 Gregorio VII や Pasquale II の身に生じたのだが——というのに、それが（法王にとって）俗権で利益をむさぼる好機だったなど書くとは。哀れな法王たちよ。彼らは生前ひどい有様でふみにじられ、迫害されたというのに、まるでそれでもまだ足りぬとでもいうかのごとく、没後何世紀も経た後に、他ならぬこのイタリアの出版物において真二つにされたばかりか、悪埒な篡奪者として告発を受けているとは^②。こうした情念に基づく攻撃に対して、M.はしきりに、読者に対して情念を避けるように訴える。たとえば、「私は彼の情熱的な法廷から、情念なき読者 (Spassionati Lettori) に訴える^③」とか、「何らかの情念がこうした真理の認識もしくは承認を妨げるかも知れないが、情念を免れた、誠実で賢明な審判にはそういうことは起こらないので、どうか今まで示されてきた証拠が何を意味するか吟味していただきたい^④」などということばを繰り返す。殉教者の伝説やあらゆる儀式を通して、日頃から叩きこまれている情念と戦うには、このような呼びかけは余りにも無力であるようにも思われるが、すでに Bruno の処刑から一世紀余り、Galilei 裁判からも半世紀以上を経て時代は変わりつつあった上、皇帝の権威を背景にした M.に対しては、F.の異端呼ばわりも効を奏すことはなかった。F.自身も、どうやら自分の大時代な告発の空しさを十分意識していたらしく、この論争における最後の文献を、「少なからぬ者が、法王庁の価値をおとしめたり、法王庁を四方八方から切りつけてやろうと努めることで自分を目立たせ、知識人 (valentuomini) として通用しようと信じている時代に入った^⑤」と嘆くことばで締めくくっている。要するに時代の趣味は変わりつつあった。

本論争は M.にかってなく深い心の傷を残した。しかしその関心を中世に向かわせて、まず Antichità Estensi, 続いて500年から1500年までのイタリアの古文書の集成 Rerum Italicarum Scriptores の編纂および論文集 Antiquitates Italicae Medii Aevi の著述へと駆り立てる出発点となった。著述家としての M.に不満を抱く研究者は多いが、皇帝の後楯があったとは言え、法王庁相手の論争にはそれ相応の勇気を要したことは否定できない。そしてイタリアの歴史研究のためには、法王庁の世俗権の限界を明らかにすることは不可欠の作業でもあった。たしかに Bruno や Pietro Giannone のような犠牲者ではなかったが、この論争における異端者呼ばわりする F.との M.の応戦ぶりを見る時、M.は臆病な御用学者などではなかったことが明らかである。同時に、この論争の持つシンボリックな意味が分かる筈である。

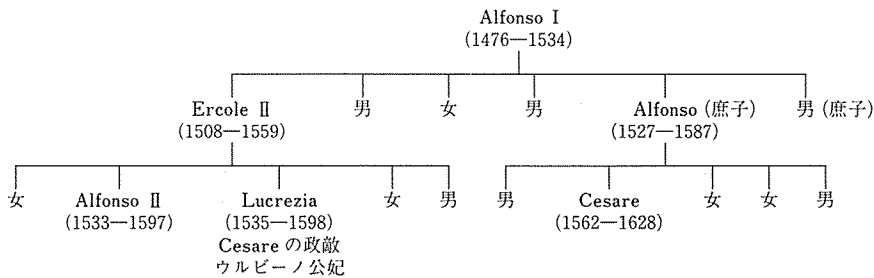
注

第一章

① 以下の記述は、主に Ist. Encicl. Ital. 編 Dizionario Enciclopedico Italiano, Vol. III, Roma 1970, pp.364—5 その他百科辞典

類の記述による。

- ② たとえば G. Pepe, *Il Medioevo Barbarico d'Italia*, Torino 1963, Cap. IV, p.245 の記述。
 ③ Hallwag, *Carta stradale, Italia*, Bern 発行年不明。縮尺は 1 : 1,000,000。
 ④ 引用箇所およびその前後の説明は、C. Castiglioni, *Storia dei Papi*, Torino 1966, p.399 の記述による。なお Alfonso II と Cesare との関係は、L. Chiappini, *Gli Estensi*, Varese 1967 所収の系図 (附録 IX, XI, XII) によると次の通りである。



Cesare は父 Alfonso が庶子だったため、フェルラーラを相続できなかった。このことが、コマッキオ論争の遠因を成している。

- ⑤ Chiappini, op.cit., p.372.
 ⑥ Clemente VIII はネポティズモを盛んに行った法王だが、こうして法王の引き立てを受けた Aldobrandini 家はその後すぐ死に絶えたといわれる。Castiglioni, op.cit., p.408. なおこの指摘はムラトーリの *Annali d'Italia* の1605年の項からの引用である。ここにもコマッキオ論争の反映が認められる。
 ⑦ Chiappini, op.cit., p.372.
 ⑧ id., p.373.
 ⑨ Castiglioni, op.cit., p.511.
 ⑩ id., p.512.
 ⑪ S. Bertelli, *Erudizione e Storia in Ludovico Antonio Muratori*, Napoli 1960, Cap. II La disputa di Comacchio, p.103 による。なおこの書の Cap. II (pp.100—174) および Appendice Prima, *Bibliografia della Polemica su Comacchio e Ferrara* (pp.468—482) は、私の知る限り最も本格的なコマッキオ論争に関する文献で、本論において度々利用させていただいたが、イタリアの文献学的研究の真似のし難い徹底性を思い知らされたことを白状しておかなければならないだろう。
 ⑫ Chiappini, op.cit., p.512.
 ⑬ Bertelli, op.cit., p.120. および Chiappini, op.cit., p.527.
 ⑭ それまでの M. の経歴については、拙稿「L.A. ムラトーリとイタリアの学問の改革」、『リソルジメント文化研究』、京都 1978 所収参照。
 ⑮ 主著は *Dell'eloquenza italiana* (1706)。この学者については将来簡単に紹介するつもりである。
 ⑯ G. Soli (mano) Muratori, *Vita del proposto Lodovico Antonio Muratori*, Venezia 1756, pp.114—118. なおこの引用文中に記載された論文の文献 8. を除く主要なものに関しては、すでに本学『学報』73—3号において簡単な紹介を行った。拙稿、資料紹介、コマッキオ論争の主要な文献について、参照。特に Fontanini の著作については、本稿とのバランスも考えてややくわしく紹介したので、それによって F. の主張は大体把握できる筈である。なお前稿で用いた文献番号を本稿でもそのまま踏襲した。本稿の注においてもその番号を用いる。念のためそれらを以下に列挙しておく。文献 1. G. Fontanini, *Dominio temporale della Seda Apostolica sopra la Città di Comacchio per lo Spazio continuato di dieci secoli*, Roma 1708. 文献 2. L.A. Muratori, *Osservazioni sopra una lettera intitolata "il Dominio temporale ecc."*, Modena 1708. 文献 3. G. F., *La Difesa del Dominio temporale ecc. (Difesa I)*, Roma 1709. 文献 4. L.A. Zaccagni, *Dissertatio historica de summo apostolicae sedis imperio in urbem comitatumque Comacii*, Roma 1709. 文献 5. L.A.M., *Supplica alla Maestà dell'Imperator Giuseppe*, Modena 1710. 文献 6. L.A.M., *Quistioni Comacchiesi*, Modena 1711. 文献 7. G.F., *Difesa seconda del dominio temporale (Difesa II)*, Roma 1711. 文献 8. L.A.M., *Piena Esposizione dei diritti imperiali ed estensi*, Modena 1712. 文献 9. L.A.M., *Ragioni della serenissima casa d'Este sopra Ferrara*, Modena 1714. 文献 10. G.F., *Ris-*

- posta a varie scritture contro la Sede in proposito di Comacchio, pubblicate dopo l'anno 1711, Roma 1720. 文献11. L. A.M., Disamina di una lettera intitolata "Risposta a varie scritture ecc.", Modena 1720. 文献13. Altra lettera diretta ad un prelado della corte Romana, Modena 1708. 文献14. Succinta Esposizione delle ragioni del S.R. Imperie e della Serenissima Casa d'Este. なお前稿では未読のため文献12.を欠番にしたが、次の文献を付け加える。文献12. Antichità Estensi e Italiana, Vol.I, II, Modena 1717, 1740.
- ⑰ M.の未刊の手稿 *Ragioni di Sua Maestà Cesare* には、より徹底した教会の世俗権への批判がなされているが、それがM.の真意だったとは見なしがたいと Bertelli はいう。Bertelli, op. cit., pp.171—2.
- ⑱ Bertelli は、M.の文献2.から8.への変化を、giuridico から storico—diplomatico への変化とするが、当初の giuridico も古い法制や管轄区域をめぐる考察と取るべきように思われる。Bertelli, op. cit., p.161.
- ⑲ M.がモデナ大学で法律を学んでいた時、その無味乾燥に神経衰弱になりかけ、文学に救われたという一種の伝説があるが、モデナ大学で教会法とローマ法の学位を得ている。才能はとも角、M.に劣らぬ努力家だった F.は、フリウーリの片田舎から出てローマで講座を持つまでの過程には、当時高位聖職者として出世するための最低の教養だった教会法を学んでいなかったはずはなかった。
- ⑳ 文献1., pp.9—10.
- ㉑ この制度は、ローマ法の *praescriptio (longissimi temporis)* (最) 長期占有による所有権の発生に由来するものと思われる。船田亨二、『ローマ法』第二巻、東京 1973, pp.502—507。しかしそうした制度を国際関係に適用する場合には、様々な解釈の余地が存在しえるのではないだろうか。
- ㉒ 文献2., p.88. Bertelli, op. cit., p.167 で、M.は文献2.においては Rosenthal とその著 *Tractatus et synopsis totius juris feudalis*, Colonia 1610.にもっぱら依拠して執筆しているとする。
- ㉓ Bertelli, op. cit., pp.150—151, p.161.
- ㉔ id., pp.151.
- ㉕ id., pp.153.この時 Huldenberg 大臣は Leibniz にも執筆を依頼し、Leibniz も承諾したが、ヴェルフェン家の歴史と同様、それは実現されなかった。しかしこの時期から M.は Leibniz と文通を始め、その M.に対する影響は大きかったという。id., pp.156—157.
- ㉖ 文献13.と14.の原題は注⑮参照。
- ㉗ Bertelli, op. cit., p.165.
- ㉘ id., p.166.
- ㉙ 文献3., p.109.
- ㉚ id., p.349.
- ㉛ 文献6., pp.3—5.
- ㉜ M.自身は生涯ローマへ行かなかった。M.Monaco, *I Rapporti di L.A.Muratori con i «letterati» romani del suo tempo*, AA.VV., in *L.A.Muratori e la cultura contemporanea*, Firenze 1975.所収, p.57. F.は皇帝側の良識がモデナ代表を同会議に出させなかったとする。文献7. p.9 および pp.12—13.
- ㉝ 文献7., p.41.でプフェンドルフが引用され、この *Avvocazia* という概念が文献7.の一つの切り札となっている。
- ㉞ id., pp.72—84.
- ㉟ 文献3., p.359.
- ㊱ M.自身、文献8.で両者の違いを利用して叙述を進める。たとえば p.2 で文献4.の品位を讃える。
- ㊲ 文献7. p.179 .
- ㊳ id., pp.206—7.
- ㊴ id., pp.255—256.
- ㊵ id., pp.257—258.
- ㊶ ページ数は省略。なお A cura di G.Falco e F.Forti, *Opere di L.A.Muratori*, Tomo I, Milano—Napoli.年代記載なし, pp.421—440.にこの論争についての簡単な紹介と、文献8.からの抜粋が出ているので、参考のためその7つの部分には下線を引いておく。
- ㊷ 文献8., p.21.

- ④③ id., p.49.
- ④④ 4条件とは文献3. p.373.に記された, 1. 皇帝が自ら派遣している, 2. 法王に招かれたのではない, 3. 法王が干渉していない, 4. 戦時, 不和, 分裂時の事件でないこと。文献7. pp.61—62。
- ④⑤ 実際には G. Villani はフィレンツェのグェルフィ党の黒派に属し, 与党として市の要職にもついた。清水広一郎氏のこの著者の経歴に関する詳細な論考が日本語でも読め, 疑問の余地がないが, 何故か M. は F. が記した Villani ギベッリーニ党员説には批判しておらず, むしろ追随しながら, Malispini で埋め合わせしている。清水広一郎, 中世イタリア商人の世界, 東京 1982, 特に p.108 の役職についての一覧表参照。なお文献3. の p.387 および文献8. の pp.186—187 にこの問題が扱われる。
- ④⑥ 文献8., p.196。
- ④⑦ id., pp.230—231.
- ④⑧ 文献5., p.52。
- ④⑨ 文献8., p.308。
- ⑤⑩ id., p.329.
- ⑤⑪ id., p.331.
- ⑤⑫ 文献7., p.312, 反論は文献8., p.345。
- ⑤⑬ (先の引用も) 文献8., p.21。
- ⑤⑭ 文献3., p.240. 他に p.291 等。
- ⑤⑮ 文献6., pp.40—41。
- ⑤⑯ 文献8., p.34。
- ⑤⑰ Bertelli, op. cit., p.124 および pp.128—129.
- ⑤⑱ id., pp.138—139.
- ⑤⑲ id., p.137.
- ⑤⑳ id., p.139.
- ⑤㉑ id., p.132 および p.149.
- ⑤㉒ 文献3., pp.180—181。
- ⑤㉓ 1859年, 中部および北部イタリアは「国民協会」の主導下で, 人民投票を進めて, 進んでサルデーニャ王国の治下に入ったことは余りにも有名である。
- ⑤㉔ 文献13., p.63。
- ⑤㉕ 文献18., p.234。
- ⑤㉖ 文献7., pp.236—237。
- ⑤㉗ 文献8., p.234。
- ⑤㉘ これは, F. が文献7. の p.236 で聖アウグスティヌスのことばを巧みに引用して記した「政治的領域は, Bosio よりもはるかに大きな溝でも飛びこえることができる」というレトリック的表現へのお返しである。
- ⑤㉙ M. 個人に関しては注④の拙稿参照。またこの学派については, 樺山紘一, 西洋学事始, 東京 1987, 「古文書学—近代の学知か」 pp.123—142 参照。
- ⑤㉚ 文献7., p.233。
- ⑤㉛ 文献8., p.229。
- ⑤㉜ 文献7., p.217。
- ⑤㉝ id., p.218.
- ⑤㉞ (前の引用と共に) id., 204.
- ⑤㉟ id., p.205.
- ⑥① 文献10., pp.45—50。
- ⑥② 文献3., p.387。
- ⑥③ (先の引用も) id.
- ⑥④ 文献8., pp.186—187。

- ⑧⑩ 文献 7., pp.179—183。
- ⑧⑪ 文献 5., p.52。
- ⑧⑫ 文献 7., p.7 および p.61。
- ⑧⑬ 文献 8., p.297。
- ⑧⑭ id., pp.322—323。
- ⑧⑮ id., p.324. .
- ⑧⑯ 文献 3., pp.92—93。
- ⑧⑰ 文献 8., pp.230—231。
- ⑧⑱ Falco e Forti, op. cit., p. XXXI.
- ⑧㉑ M.Monaco, op. cit., pp.95—100.
- ⑧㉒ M.が余裕を持って論争を行っている証拠の一つは、論敵 F.の著書中のことばをしばしば(時には必要もないのに)引用していることで、私の知るかぎりでも、少なくとも7回 (pp.88, 94, 102, 132, 177, 211, 213) 引用していて、読者に様々の臆測を行わせる。大抵は最大限といえる程の讃辞と共に引用しながら、論敵の主張を破るのに用いている。
- ⑧㉓ 文献 8., p.314。
- ⑧㉔ 文献 7., p.143。
- ⑧㉕ 文献 8., p.109。
- ⑧㉖ id., p.101.
- ⑧㉗ 文献10., p.63。